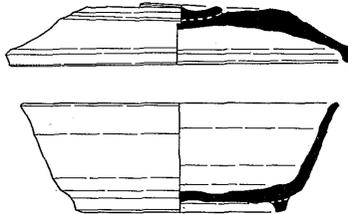


太宰府・佐野地区遺跡群Ⅱ

— 宮ノ本遺跡第3・4次調査 —



9号窯跡灰原 X層出土遺物

1991

太宰府市教育委員会

太宰府・佐野遺跡群Ⅰ 正誤表

頁・行	誤り	訂正
12頁	灰原分布範囲	灰原分布範囲
14頁 21行	Fig.2	Fig.7
15頁 32行	Ⅵ-5・6層	Ⅶ-3・4層
16頁 4行	ても最も量が多いのは	て最も量が多いのは
16頁 8行	Fig.2	Fig.7
31頁	炭火物	炭化物
33頁 13行	高台接地	高台接合
33頁 24行	型式	属性
38頁 11行	$13\text{cm} \leq \phi \leq 15\text{cm}$	$13\text{cm} \leq \phi \leq 15\text{cm}$
40頁	Pl.13 天井部外面の処理-(ii)	Pl.13 天井部外面の処理-(i)

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅱ

太宰府都市計画事業佐野土地区画整理
に伴う埋蔵文化財調査報告書（2）

1991

太宰府市教育委員会

序

昭和62年度から開始されました佐野土地区画整理事業の事前調査も、前田遺跡の奈良時代における官道の発見や、弥生時代前期ならびに後期後半の集落跡の発見など数多くの成果を上げることができました。

本書は、この成果の一部として、太宰府市教育委員会が平成元年度に調査を行いました、宮ノ本遺跡の調査報告書であります。

今回報告いたします宮ノ本遺跡の地は、1号墓より出土いたしました買地券など、貴重な文化遺産を埋蔵した宝庫にあたり、これまでの調査で墓地としての性格と、窯跡を中心とした生産の場としての2面性を有した遺跡であることが解りつつあります。

今回は第1次調査から数えて3次ならびに4次調査にあたり、調査の結果、前述いたしました宮ノ本遺跡の持つ性格の中で、生産の場としての遺構を検出いたしております。これまでの調査成果を踏まえまして、須恵器を生産した人々の作業の一端を、痕跡なりとも明らかにできればと思い調査を進め、成果をまとめました。

ここにその調査成果を公にし、将来にわたって一人でも多くの方々に宮ノ本遺跡の存在を認識され、埋蔵文化財の大切さを御理解いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、本報告をまとめるにあたり御協力、御援助いただいた関係諸機関に感謝申し上げますとともに、技師とともに現場にて調査に参加されました作業員の方々に厚くお礼申し上げます次第であります。

太宰府市教育委員会

教育長 長野 治 己

例 言

1. 本書は太宰府市教育委員会が、昭和63年度と平成元年度に実施した太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴う宮ノ本遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地点、調査組織、調査期間等は第Ⅱ章に記した。
3. 検出遺構の実測及び写真撮影は城戸康利・中島恒次郎・緒方俊輔、出土遺物の実測は中島・山村信榮・古賀里恵子、出土遺物の写真撮影は岡紀久夫、調査地点の空中写真は(有)空中写真稲富・(有)空中写真企画・アジア航測株式会社、調査地点の現況地形図作成は大成測量設計株式会社、アジア航測株式会社がそれぞれ行った。
4. 遺構実測図、地形図は国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって図中に示される方位は特に注記のない限り、座標北 (G. N.) を指している。
5. 本書の執筆は目次に記載したとおりである。
6. 本書の編集は狭川真一の指導のもと、中島恒次郎が行った。



宮ノ本遺跡と大宰府（南西から）



調査開始前の宮ノ本遺跡（南西から）

目 次

I. 遺跡の位置と環境	(中島恒次郎).....	1
II. 調査に至る経過	(狭川真一).....	6
III. 調査の概要		
(1) 第3次調査		
①遺構	(狭川).....	9
②遺物	(山村信榮).....	9
③小結	(狭川).....	10
(2) 第4次調査		
①窯跡	(中島).....	11
9号窯跡		
1. 遺構		
2. 遺物		
灰原		
1. 堆積構造		
2. 遺物		
②焼土壙	(中島).....	30
1. 遺構		
③小結	(中島).....	30
IV. 成果と問題の所在	(中島).....	32
①9号窯跡の位置付け		
②焼土壙		
③問題点の抽出		
V. まとめ	(中島).....	47

I. 遺跡の位置と環境

宮ノ本遺跡は、大宰府の西域に広がる標高50m～70mの丘陵地帯に所在している。この丘陵地帯は、背振山地から東部へのびる丘陵の一端を占め、花崗岩を基盤岩とする地質環境下にある。このような地質環境下に所在する遺跡群は、石英に富む酸性岩である花崗岩風化生成物中に形成されており、出土する土器群などの土製品の多くはこれらを原料土として製作されたものと考えられる。宮ノ本丘陵地帯には、4世紀後半から5世紀前半と考えられている宮ノ本古墳群をはじめ、買地券を出土した宮ノ本遺跡第一号火葬墓など墓域としての性格を有しており、中世における篠振遺跡の墳墓の形成まで、連綿とした造墓活動が成されている地域にあたる。これは宮ノ本丘陵地帯周辺が、大宰府を一望できる地であることと、古代中世の大宰府において西方に位置することに起因していると考えられる。

また宮ノ本遺跡は、日本三大窯跡群に加えられる、牛頸窯跡群の東端部に位置しており、一支群を形成している。牛頸窯跡群は、御笠川の支流である牛頸川を挟んで東西約4km、南北約5kmの範囲に分布し、6世紀中頃から9世紀初頭にかけての時期に須恵器生産を行った窯跡群が集中する区域である。調査が行われた窯跡は約200基を数え、地域ごとの支群に分けると約40近い窯跡群によって構成されている。宮ノ本遺跡を窯跡群としてみた場合、これまでの2次にわたる調査から、須恵器生産の開始を7世紀中頃に求め、終焉を8世紀後半の時期に求めることができそうである。

さて、第3・4次調査成果にもとづくならば、第4次調査において検出した遺構・遺物と同様の状況をうかがわせる窯跡は、現在のところ牛頸窯跡群中において約37基検出されており、いずれも小型品を中心とした製品が焼造されている。牛頸窯跡群内における分布状況は周辺部に散布する状況を看取できるものの、未確認窯跡群の存在があり、今後の調査資料集積と検討が必要である (Fig. 1・2 Tab. 1・2)。

また古代における牛頸窯跡群の生産集団の背景を伺い知る考古資料が、近年出土している。大野城市牛頸ハセムシ窯跡群12地点から、調雑物として納められたことを記すヘラ書き文字のある大型の甕、さらに宮ノ本遺跡第1次調査の際出土した須恵器・坏c体部にヘラ書きされた記号と同様の記号を有する須恵器・坏cが大宰府史跡 第98次調査地より出土している。

このように宮ノ本の地は、須恵器生産地としての土地利用と、その背景にある大宰府との関係がうかがえるが、先述した墓域としての土地利用状況を考え合わせると、両者が共存していたと同時に大宰府と密接に結び付く関係が想定できよう。

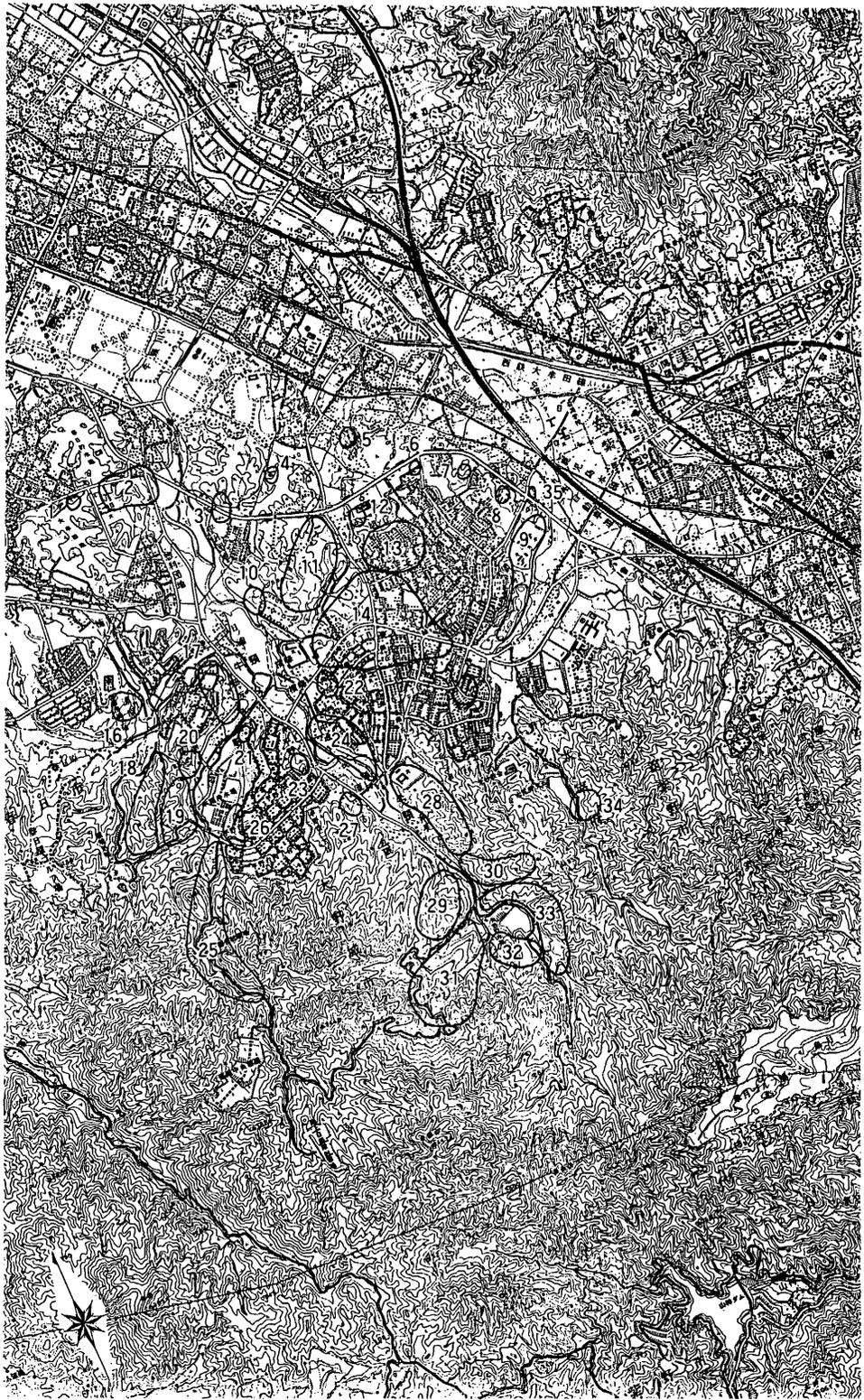


Fig. 1 牛頸周辺における窯跡群

記号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
1	大牟田池窯跡	春日市大字春日1524-57	窯跡1基以上(須恵器)	
2	惣利窯跡群	〃 〃 字惣利	窯跡15基以上(須恵器)	昭和52～55年春日市教委調査(9基)
3	春日平田窯跡群	〃 〃 字平田	窯跡21基(須恵器)	昭和57～60年春日市教委調査(21基)
4	梅頭窯跡	大野城市大字上大利字梅頭	窯跡1基(須恵器)	消滅(未調査)
5	出口窯跡	〃 〃 字出口	窯跡1基(須恵器)	
6	神の前窯跡群	太宰府市大字吉松字神ノ前	窯跡2基(須恵器・瓦)	昭和53年太宰府市教委調査(2基)
7	篠振窯跡	〃 〃 字篠振	窯跡2基	昭和59・60年太宰府市教委調査(2基)
8	長浦窯跡	太宰府市大字向佐野字長浦	窯跡1基(須恵器)	昭和47年福岡県教育委員会調査
9	宮ノ本窯跡群	太宰府市大字向佐野字宮ノ本	窯跡9基(須恵器)	昭和54年太宰府市教委調査(3基) 昭和59年7月太宰府市教委調査(5基)
10	華無尾窯跡群	大野城市大字牛頸字華無尾	窯跡2基(須恵器)	消滅(未調査)
11	野添窯跡群	〃 大字上大利字野添	窯跡10基以上(須恵器)	昭和44年福岡県教委調査(2基) 昭和61年大野城市教委調査(3基)
12	谷蟹窯跡	〃 〃 字谷蟹	窯跡1基(須恵器)	消滅(未調査)
13	大浦窯跡群	〃 〃 字大浦	窯跡5基(須恵器・瓦)	昭和43年福岡県教委調査(2基)
14	平田窯跡群	〃 大字牛頸字平田	窯跡9基(須恵器)	昭和47年立正大学調査(4基) 昭和54～56年大野城市教委調査(4基)
15	上平田窯跡群	〃 〃 字上平田	窯跡4基(須恵器)	昭和47年福岡県教委調査(4基)
16	浦ノ原窯跡群	春日市大字下白水字浦ノ原	窯跡10基以上(須恵器・瓦)	昭和53年春日市教委調査(8基)
17	畑ヶ坂窯跡群	大野城市大字牛頸畑ヶ坂	窯跡3基(須恵器)	1基消滅
18	後田窯跡群	〃 〃 字後田	窯跡15基以上(須恵器・瓦)	昭和61年大野城市教委調査(16基)
19	小田浦窯跡群	〃 〃 字小田浦	窯跡14基以上(須恵器)	昭和51年立正大学調査(4基) 昭和57～61年大野城市教委調査(9基)
20	月ノ浦窯跡群	〃 〃 字月ノ浦	窯跡2基(須恵器)	昭和57年大野城市教委調査(1基)
21	胴ノ元窯跡群	〃 〃 字胴ノ元	窯跡2基(須恵器)	
22	東浦窯跡群	〃 〃 字東浦	窯跡3基(須恵器)	昭和43年国士館大学調査(3基)
23	城の山窯跡	〃 〃 字城の下	窯跡1基以上(須恵器)	窯本体が空洞で露出している
24	中通窯跡群	〃 〃 字中通 字入道堂	窯跡12基以上(須恵器)	昭和54・55年県教委・大野城市教委調査(6基)
25	石坂窯跡群	〃 〃 字石坂	窯跡20基以上(須恵器)	昭和58年大野城市教委調査(2基)
26	大谷窯跡群	〃 〃 字大谷	窯跡12基以上(須恵器・瓦)	昭和46年国士館大学調査(4基)
27	原窯跡群	〃 〃 字原	窯跡3基(須恵器)	土取りで灰原の一部を残すのみ
28	ハセムシ窯跡群	〃 〃 字ハセムシ	窯跡30基以上(須恵器)	昭和62年大谷女子大学・大野城市教委調査(15基)
29	井手窯跡群	〃 〃 字井手	窯跡39基以上(須恵器)	昭和57～61年県教委調査(31基) 昭和63年大野城市教委調査(3基)
30	道ノ下窯跡群	〃 〃 字道ノ下	窯跡10基以上(須恵器)	昭和57～61年県教委調査(10基)
31	足洗川窯跡群	大野城市大字牛頸字足洗川	窯跡5基以上(須恵器)	昭和57～61年県教委調査(4基)
32	笹原窯跡群	〃 〃 字笹原	窯跡4基以上(須恵器)	同上(4基)
33	長者ヶ原窯跡群	〃 〃 字長者ヶ原	窯跡16基(須恵器)	同上(16基)
34	野口窯跡群	太宰府市大字大佐野字野口	窯跡2基以上(須恵器)	
35	向佐野窯跡	太宰府市大字向佐野字前田	窯跡1基(須恵器)	昭和47年福岡県教育委員会調査

Tab. 1 牛頸周辺の窯跡群
(大野城市教育委員会(1988)『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』より抽出改変)

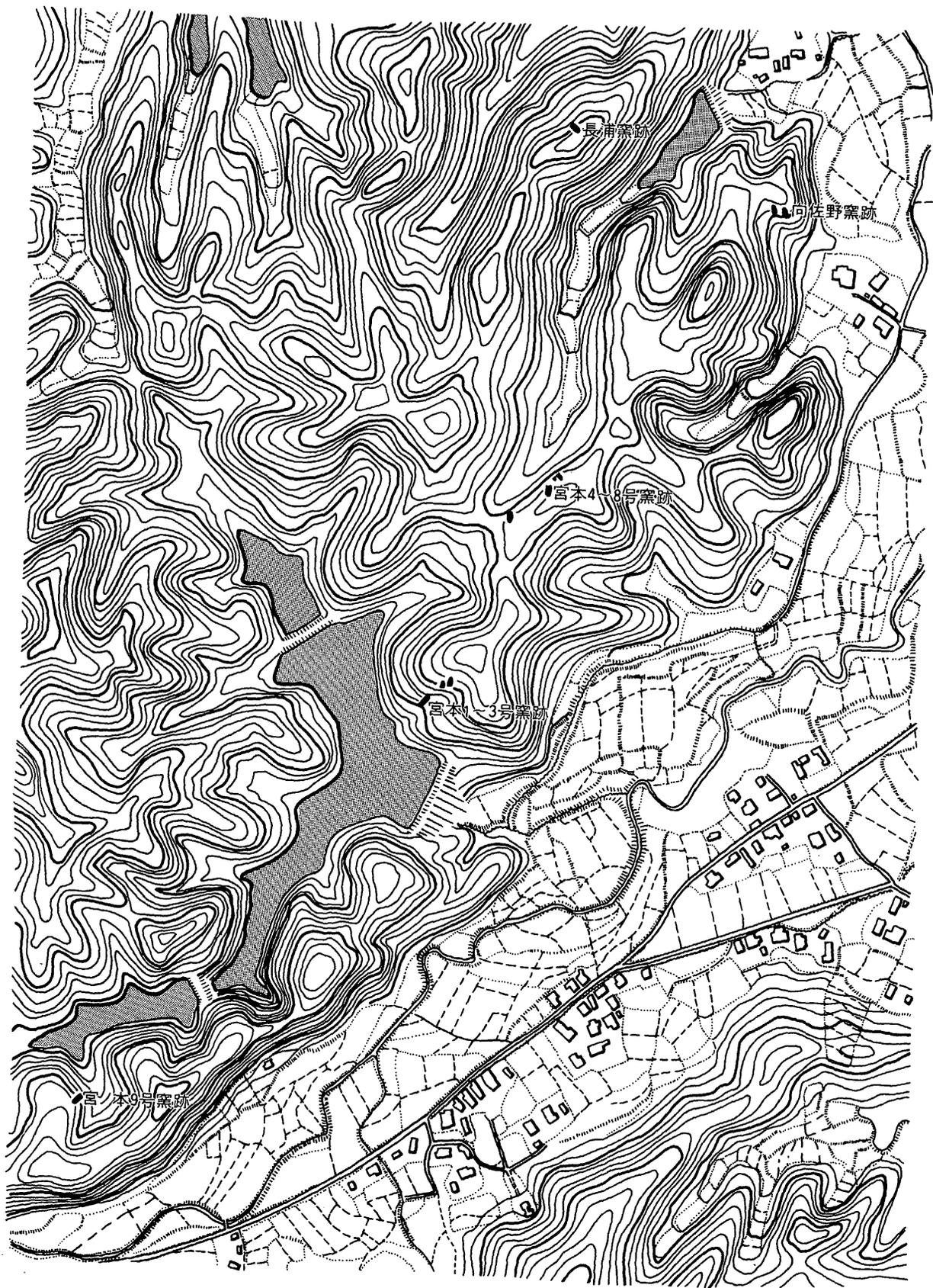


Fig. 2 宮ノ本9号窯跡周辺の窯跡(S=1/20,000)

Tab. 2 関連窯跡一覧(牛頭窯跡群内)

窯跡名	規模(m)	主軸方向	焼成部床面傾斜角	掲載文献
井手窯跡群 1号窯	3.18	N15°E	26°~45°	1
井手窯跡群 3号灰原	—	—	—	1
井手窯跡群 6号窯東	—	—	—	1
井手窯跡群 9号窯	(2.8)×0.8	N34°W	40°~50°	1
道ノ下窯跡群 灰原	—	—	—	1
道ノ下窯跡群 14号窯	5.4×1.2	N20°E	24°~36°	1
道ノ下窯跡群 16号窯	3.25×1.0	N23°E	35°	1
道ノ下窯跡群 17号窯	5.35×1.8	N39°E	33°	1
道ノ下窯跡群 18号窯	2.5×0.7	N20°E	17°~32°	1
井手窯跡群 32号窯	3.0×1.03	N40°W	31°	2
井手窯跡群 33号窯	(2.9)×0.92	N9°E	40°	2
井手窯跡群 29.33号窯灰原	—	—	—	2
井手窯跡群 38.39号窯灰原	—	—	—	2
井手窯跡群 43号窯	4.0×1.05	N68°W	37°	2
井手窯跡群 44号窯	3.15×1.03	N10°E	15°~32°	2
井手窯跡群 45号窯	3.0×0.76	N88°W	15°~35°	2
井手窯跡群 46号窯	3.85×1.2	N14°W	38°	2
井手窯跡群 1号窯	2.5×0.85	N51°W	20°~50°	3
井手窯跡群 2号窯	5.5×1.6	N50°W	30°	3
長者原窯跡群 59号窯	2.8×0.95	N40°E	41°	2
長者原窯跡群 61号窯	(2.5)×0.95	N18°W	35°	2
長者原窯跡群 62号窯	(2.85)×0.95	N35°W	26°	2
長者原窯跡群 63号窯	(4.3)×1.1	N7°W	21°~36°	2
長者原窯跡群 64号窯	4.0×1.15	N40°E	24°	2
長者原窯跡群 65号窯	4.55×1.05	N46°E	33°	2
笹原窯跡群 69号窯	3.75×0.97	N80°E	10°~36°	2
浦ノ原窯跡群 1号窯	3.2×1.05	N12°W	41°	4
浦ノ原窯跡群 2号窯	(2.7)×0.73	N0.5°W	40°	4
浦ノ原窯跡群 3号窯	(3.35)×1.2	N44°E	36°	4
浦ノ原窯跡群 7号窯	2.5×0.68	N27.5°W	26°	4
浦ノ原窯跡群 8号窯	3.1×0.9	N60.5°W	38°	4
ハセムシ窯跡群 1号窯	(3.1)×0.9	N103°W	30°	5
ハセムシ窯跡群 7号窯	5.15×1.3	N176°E	32°	5
ハセムシ窯跡群 9号窯	7.05×1.5	N175°W	24°	5
ハセムシ窯跡群 3号窯	(8.6)×1.8	N20°W	27°	6
宮ノ本窯跡群 2号窯	(3.1)×?	N3°W	15°	7
宮ノ本窯跡群 3号窯	(1.6)×0.8	N17°W	23°	7

文献

1. 福岡県教育委員会(1989)【牛頭窯跡群】Ⅰ
2. 福岡県教育委員会(1990)【牛頭窯跡群】Ⅱ
3. 大野城市教育委員会(1989)【牛頭井手窯跡群】
4. 春日市教育委員会(1981)【浦ノ原窯跡群】
5. 大野城市教育委員会(1989)【牛頭ハセムシ窯跡群】Ⅱ
6. 大野城市教育委員会(1988)【牛頭ハセムシ窯跡群】Ⅰ
7. 太宰府町教育委員会(1980)【宮ノ本遺跡】

Ⅱ. 調査経過

昭和62年9月に開始した佐野土地区画整理事業に伴う一連の調査である（調査経過の詳細は『佐野地区遺跡群Ⅰ』太宰府市の文化財 第14集 参照）。

今回報告する宮ノ本遺跡は、昭和54年度に太宰府西小学校建設に伴って発見された遺跡で、昭和59年度にも太宰府西中学校建設に際して調査されている。今回はこの2地点から西に小さな谷を隔てて続く低丘陵部分を調査した。この丘陵は区画整理事業に際しての土取り場であると共に、土取り後は整地を行い宅地と化する部分に該当している。

この宮ノ本遺跡の調査は、昭和54年度に実施したものを第1次調査、次の昭和59年度に実施したものを第2次調査と称している関係から、調査順にしたがって第3次調査、第4次調査…と呼称することとした。

調査は区画整理事業の進行に合わせて該当箇所が設定されるため、随時太宰府市区画整理課と協議を行いながら実施した。

今回報告する第3次調査は太宰府市大字向佐野字宮ノ本242-1、大字大佐野451-1他に所在し、昭和63年4月19日から5月14日まで実施した。調査面積は9000㎡である。第4次調査は太宰府市大字向佐野字宮ノ本240、大字大佐野411に所在し、平成元年4月18日から5月29日まで実施した。調査面積は9600㎡である。遺物整理及び報告書作成は、平成2年度を中心に行った。

調査組織は以下のとおり。

調査主体 太宰府市教育委員会

総括	教育長	藤 壽人（昭和60年3月～）
	教育長	長野 治己（平成元年12月～）
庶務	教育部長	西山 義則（昭和63年12月～）
	社会教育課長	花田 勝彦（昭和59年10月～）
	社会教育課長	関岡 勉（昭和63年12月～）
	文化財係長	鬼木富士夫
	主事	岡部 大治
	主事	白水 伸司
	技師	山本 信夫
	技師	狭川 真一（第3次調査担当）
	技師	城戸 康利（第4次調査担当）
	技師	緒方 俊輔（第4次調査担当）
	技師	山村 信榮（第3・4次調査担当）
	（囑託）	中島恒次郎（第4次調査担当）

(囑託) 狭川 麻子

調査参加者 (順不同、敬称略)

田中 平助	萩尾 昇	萩尾 泰祐	藤原 重登	三上 智久
斉藤 徳美	八柳健之助	岩男 澄子	川原田美千代	早田ミツル
中嶋 幸子	中嶋さなみ	米原 峰子	宮田 恵子	岸 邦子
柴田ツキエ	太田ヤス子	大田 敬子	高鍋キミヨ	宮原 圭子
宮原ハナエ	古川トミ子	古川 民子	古川ヨシ子	山本 洋子
白水イセノ	田原智恵子	徳永モモエ	中島タカ子	中島タキノ
中嶋はじめ	萩尾万寿子	平島 優子	松島 順子	高原改良子
白木ハルミ	大迫フミ子	江島スミエ	戸渡ひろみ	萩尾須磨子
萩尾カネ子	田中テル子	花園美千子	山下 澤子	渡辺ひとみ
楠林 静香	吉田 正子	植村奈留美	大久保悦子	近藤 秋枝
境 美佐子	大田八重子	中溝 洋子	田口美智子	内田 文子

永見 秀徳 (現 筑後市教育委員会)

整理参加者 (順不同、敬称略)

原野 正子	吉田 勝子	久保喜代香	堀尾はるみ	林 美知子
中村 房子	野田 美子	古賀里恵子		

発掘調査を実施するにあたって快く承諾をいただいた地権者の方々は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

白石 将	白石 護	大田勘兵衛	辻 信子	松寄恵美子
大田 勝喜				



Fig. 3 宮ノ本遺跡 第3・4次調査区

Ⅲ. 調査の概要

(1) 第3次調査 (Fig. 3)

開発対象となった範囲の南側斜面は、急傾斜となっており遺跡の存在する可能性が低いことと作業の安全を考慮して調査の対象から除外した。また調査対象地の西側部分には小さな谷を埋めるほどの大量の残土が投棄されており、この投棄時において丘陵の頂部付近が重機によって大きく削平されていたため、この部分も調査の対象から除外した。このため調査は残存する尾根部分と北側斜面に限られる結果となった。

① 遺構

調査の結果、表土を除去するとすぐ花崗岩風化土の地山が検出され、かなり広範囲にわたって調査区を設定したにも関わらず若干の遺物を検出した他は、遺構は検出されなかった。

② 遺物 (Fig. 4)

縄文土器

深鉢 (1～4)

1、2は、口縁上面の一部が台形状に張り出す形状をなす粗製の深鉢である。1は外面に水平に近い斜方向に凹凸を残す粗いナデが施され、内面には（器面が平滑な状況を見ると）丁寧なナデが施されている。淡茶褐色を呈す。

2は、外面が粗いナデのまま、内面は丁寧なナデによって平滑な面を成している。1とは胎土などより別個体の可能性が高い。

3は、全体の形状は不明。外面に稜をもって屈曲する部分がある。内面には粘土紐接合部分に沿ったユビオサエがあり、その上にナデがかかる。屈曲部にはヨコ方向のナデが施されている。茶褐色を呈す。

4は、内外面ともに装飾を持つ。外面と思われる側には幅3～4mmの平行する縦線を、内面には同程度の幅を持つ平行する横線を描く。胎土には滑石を含まず、脆い。橙色もしくは茶褐色を呈す。

1から3は縄文後晩期、4は前期の所産と考えられる。

丘陵の頂部に近い尾根線上で採集されたものばかりで遺構に伴うものではない。

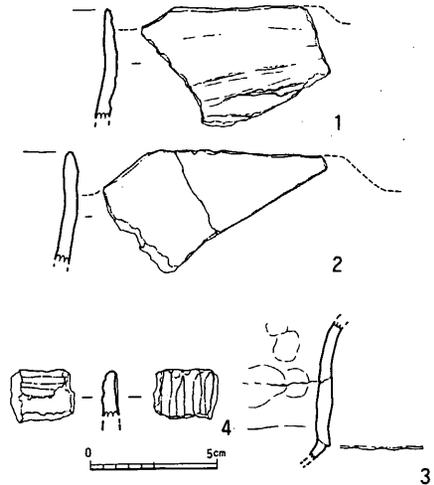


Fig. 4 第3次調査出土遺物

③小結

調査の結果、遺構は全く検出されなかった。この事実は南側斜面が急角度であることや、尾根頂部の平坦部がほとんど無いこと、平野からかなり奥に入り込んでいることなどがその要因として考えられる。しかしながら、数点ではあるにせよ縄文土器を検出したことから、早くから人間の出入りのあったことだけは窺われよう。

(2) 第4次調査 (Fig. 3 Pl. 15)

調査対象地は第3次調査同様、安全性ならびに遺構の存在する可能性が低いことから宮ノ本丘陵の南側斜面を除外し、北側斜面のみを行った。今次調査では、丘陵頂部よりやや降りた標高58.6mの位置に窯跡を1基（9号窯跡）、さらに9号窯跡によって形成された灰原の下位に2基（宮4SX001・SX002）の焼土壙を検出した。

① 窯跡

9号窯跡

1. 遺構 (Fig. 5・6 Pl. 15～17)

標高58.5m～60.0mの間にはほぼ等高線を直交する形で構築されている。焚口部を標高58.6mの位置に設け、前庭部が崩落した状況で検出できた。窯体の主軸残存長は3.1mを測り、花崗岩で構成される基盤層を削り貫いた地下式無階無段登窯である。主軸方向は約N11°33'Wで、焚口を北方へ開くように構築されている。床面最大幅は焼成部で約0.85mを測り、最小幅は燃焼部で約0.68mを測る。焼成部床面傾斜角は約24°である。天井の残存状況は、燃焼部付近から煙道部まで残っていたが、調査進行に伴って崩落した。床面から天井までの高さは約0.32m～0.40mを測る。また、各部における補修痕跡は確認できていない。

窯跡周辺における附属施設は、検出できなかった。

前庭部 自然崩壊に伴って窯体前面を欠損しているものの、当該窯跡に伴うと考えられる灰原が残存する前庭部の0.5m下方より堆積していることから、さほど崩壊していないものと考えられる。

窯体

a. 焚口・燃焼部 残存最大幅は約1.40mを測り、窯体最小幅でもある燃焼部幅は約0.68mである。また傾斜変換点までの主軸上における残存長は約1.7mほどである。さらに前庭部と燃焼部のなす角度は約6°34'、燃焼部と焼成部のなす角度は約15°56'をそれぞれ測り、僅かに焼成部へむけて上がり気味に傾斜するものの、肉眼的にはほぼ平坦面を形成している。焚口部床面直上において、焼成部より転落した状況で須恵器・坏cが2点出土している。

b. 焼成部 主軸上における長さは約2.04mを測り、床面傾斜角は約24°である。燃焼部における窯体最小幅を境として、焼成部へむけて徐々に膨らみ、焼成部中位において床面最大幅約0.85mを測る。この部位からはほぼ同じ幅を保ちつつ煙道部へ至る。床面から天井までの高さは約0.32m～0.4mを測り、奥壁へむかうにつれて低くなっている。煙道部付近において部分的にはあるが、焼き台の残存状況が確認できた。焼成部からは、遺構内に堆積している流

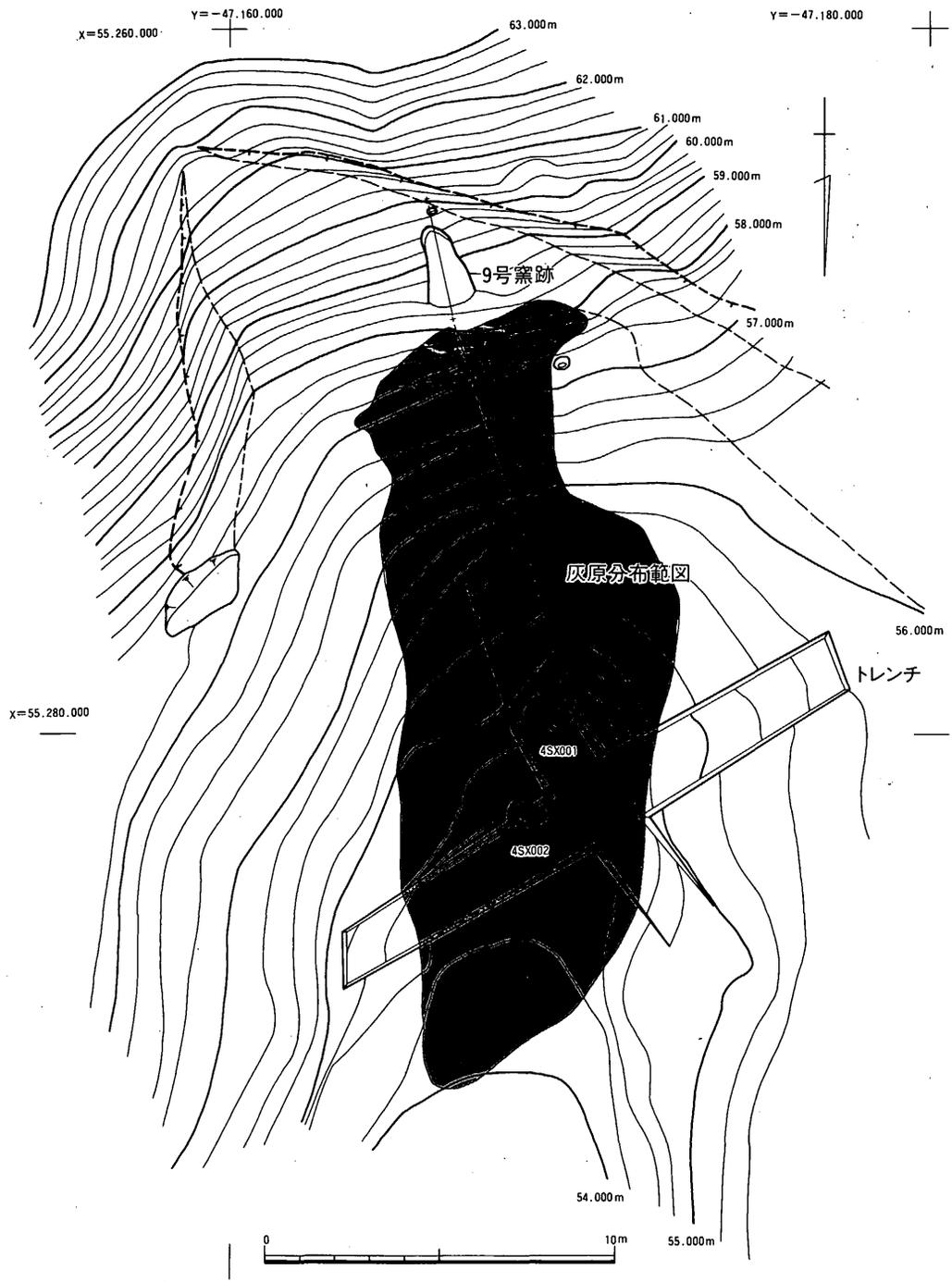


Fig. 5 第4次調査遺構配置図 (S=1/200)

れ込み土中より、須恵器・蓋c1・蓋c3・壺蓋a・坏cが出土している。

c. 奥壁・煙道部 奥壁は、焼成部床面が奥行き約0.1m・高さ0.2mほどオーバーハング気味に立ち上がり、焼成部床面とのなす角度が約75°を測る。ところで煙道部において改変が成されており、窯体構築頭初の煙道幅は約0.34mであったのに対し、最小幅0.1m～最大幅0.2mの円錐形を呈する形に、いわば閉塞気味に修復改変されている。修復改変の粘土厚が約0.16mほどあり、焼成時に一時的に閉塞を目的として塗り固めたものとは考え難い状況である”。

註1) 燃焼時には、煙道より炎が噴き出している状況下であり不可能である。煙道を閉塞する時期としては、燃焼を終了し窯内部の温度を徐々に低下させる際、雨水等の急激な温度低下の要因を排除する目的でなされたものと考えられる。煙道部の直径を当該窯跡での状況に縮小しておけば、須恵器・大蓋でもこの目的は達せられることになる。しかし煙道の縮小化に伴い、燃焼効率の低下にもつながることになり、この点に関しては検討を要するものの、煙道部より希に出土する須恵器・蓋ならびに甕の破片の性格については今一度考える必要がある。

2. 遺物

焚口部床面出土遺物 (Fig. 7 Pl. 18 Tab. 3)

焚口部床面直上において出土したものであるが、焼成時の原位置を保つものではなく、焼成部より転落した状況で出土した。遺物は、須恵器・坏cのみである。

坏c (1・2) 口径11.75・11.8cm、器高3.9・3.85cmを測り、底部よりやや丸みを有しつつ口縁部まで立ち上がる。高台の形状はほぼ正方形を呈し、底部から体部への移行が明瞭に分かれ、高台接合のための回転ナデ調整による稜線が体部側にやや明瞭に残っている。(1)は、焼け歪のためか亀裂を生じているものの、(1・2)ともに完形に近い状態である。

埋土中出土遺物 (Fig. 2 Tab. 3)

遺構解説において記述したように、全て上部から窯体内への流れ込み層中より出土した遺物であり、須恵器・坏c・蓋c1・蓋c3・壺蓋a等がある。

蓋c1(3) 口径14.9cm (かえり径:13.0cm)、残存器高2.3cmを測り、ツマミが欠損している。やや器厚があり鋭さに欠けており、焼成も不良(還元度も不良)である。天井部外面の処理はやや丁寧な回転ヘラ削りを行っており、内面は回転ナデのみである。

蓋c3(4) 口径13.65cm、残存器高1.8cmを測り、ツマミが欠損している。口縁部形状は、明瞭な断面三角形を呈しており、口縁端部の処理は一回の回転ナデによって仕上げている。天井部外面の処理は、非常に粗い回転ヘラ削りを行っており、明瞭に回転ヘラ切り痕跡を残している。

壺蓋a(5) 小破片であり口径復元は困難である。口縁端部をやや内傾気味に平坦に仕上げ

いる。口縁端部処理は、二回の回転ナデによって仕上げている。

坏c(6・7) 口径11.4・13.1cm、器高3.95・3.85cmを測り、底部より直線的に直立気味に立ち上がる。高台の形状はほぼ正方形を呈し、(6)は底部から体部への移行がやや不明瞭であり、高台接合のための回転ナデ調整による稜線が高台および体部側に明瞭に残っている。(7)は底部から体部への移行が屈曲によりやや明瞭であり、高台接合のための回転ナデ調整による稜線が不明瞭である。底部外面の処理は、(6)が回転ヘラ切り後やや粗いナデによって最終処理を行っており、(7)は回転ヘラ切り後未調整である。

灰原 (Fig. 6 Pl. 17)

9号窯跡前面の狭小な谷部に堆積しており、最大幅8m、層厚は18cm～40cmを測る。前述したように、9号窯跡前庭部が自然崩壊に伴って欠失しており、直接的に9号窯跡との関係を検討することはできない。しかし、9号窯跡が立地する谷部に他の遺構を検出し得なかったこと、ならびに9号窯跡前庭部の0.5m下方より灰原の堆積が確認できていることから、ほぼ9号窯跡単独の灰原であると考えられる。しかし、堆積構造で述べるが、第Ⅶ-3・4層の炭化物・遺物包含層に関しては、検討の必要がある。

1. 堆積構造

包含する堆積物の差異より分層でき、さらに層相により大きく12の層群にグルーピングできる状況を呈している。堆積状況は、炭化物ならびに遺物を多量に包含している層(Ⅲ、Ⅳ-4、Ⅴ-6・8、Ⅵ-6、Ⅶ-5・6層。以下「黒色灰層」と呼称する。)と無遺物の層が交互に堆積している状況が観察でき、堆積層序は無遺物層の下位に黒色灰層の層序をとり、さらにその下位にある無遺物層との境界をもって層群の境界と考えた(無遺物層→黒色灰層→/→無遺物層)。また層相からも一層群中において黒色灰層を除いて上方粗粒化の傾向を示しており、堆積傾向が著しく変化する境界でもある。なお灰層が確認できる層位は、第Ⅶ層までであり、その下位に堆積している第Ⅷ～Ⅺ層に関しては地山土層と区別ができない黄色土系の堆積層である。また土層観察断面においては分層可能であるが、堆積面として確認できるほどの広がりはなく、レンズ状に堆積した土層であると考えられる。

Ⅺ層を埋土とするSX002土壌が下位より検出でき、SX002に伴うと考えられる灰層(Ⅻ層)が確認できた。

各堆積層群は、前述したように上位から無遺物層→黒色灰層の層序で堆積しており、順次上位より堆積してきた過程を示しているものと考えられる。

なお第Ⅰ・Ⅱ層は、遺構検出時にバックフォアの削り落としに伴う、上位からの堆積層であり、第Ⅲ層をはじめとする上位に堆積している黒色灰層の崩壊層である。

遺物の出土量は、第Ⅲ、Ⅵ-6、Ⅶ-5・6層から多器種・多量に出土している。

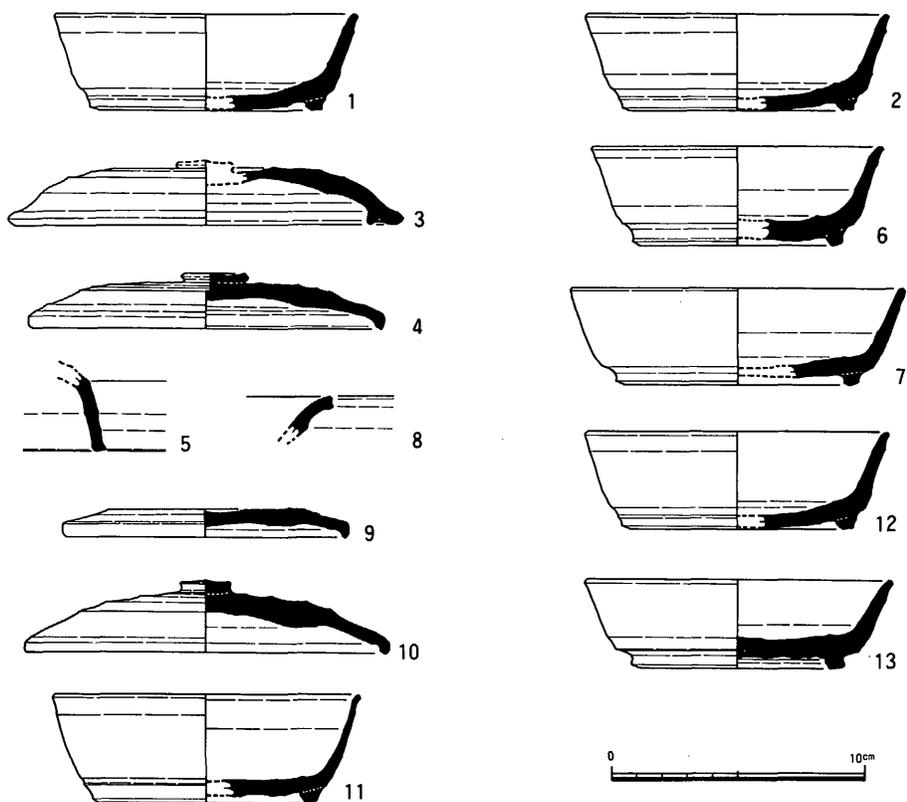


Fig. 7 焚口部床面・埋土・第Ⅱ層出土遺物

2. 遺物

須恵器、坏 a・坏 c・蓋 c1・蓋 c3・壺蓋 a・鉢 b・壺 b・甕等が出土しており、非常に微量であるが、土師器・甕の口縁部片が第Ⅲ・Ⅷ層より各1点ずつ出土している。出土器種としても最も量が多いのは、坏 c ならびに蓋 c3 であり主として小型品を焼成している。甕は製品もしくは近似する形での出土ではなく、体部破片を焼き台として転用したものと考えられる状況で出土している。

以下に各土層ごとに出土した遺物を解説する。

第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 (Fig. 2 Tab. 3)

本土層は、調査時の攪乱層であるため一括して解説する。しかし第Ⅰ層出土遺物に関しては、細片化しており図化が困難であったが、蓋 3・坏破片が出土している。第Ⅱ層より出土した器種は、須恵器、坏 c・蓋 c3・小蓋 a3・壺 b 等がある。

小蓋 a 3(9) 口径11.0cm、器高1.1cmを測り、口縁部形状は明瞭な断面三角形を呈している。

天井部から口縁部へは、わずかに屈曲しつつ移行する。口縁端部の処理は、二回の回転ナデによって仕上げられており、天井部外面は回転ヘラ切り後未調整である。

蓋c 3(10) 口径14.2cm、器高2.8cmを測り、口縁部形状は明瞭な断面三角形を呈している。天井部から口縁部へは、境界が不明瞭に移行する。口縁端部の処理は、二回の回転ナデによって仕上げられている。天井部外面の処理は、丁寧な回転ヘラ削りをほどこし、内面は回転ナデ後粗い不定方向のナデによって仕上げている。ツマミ形状は、残存部分が僅かであり推定にすぎないものの、推定直径2.0cmを測りやや小形の形状を示す。

坏c (11~13) 口径11.75cm~12.0cm、器高3.55cm~4.3cmを測り、底部よりやや直立気味に立ち上がるもので、高台形状は台形ないしは長方形を呈している。高台の接合状態は、体部より屈曲なく高台へ移行するもの(11)。体部と底部の境界の屈曲が明瞭であるもの(12・13)の2種がある。いずれも高台接合のための回転ナデ調整による稜線が、体部および高台に明瞭に残存している。高台接合位置によって細分できるが、後述する理由で製作技術の精粗による差異の可能性があるため、ここでは二分しておくにとどめておく。底部外面の処理は(12)が器面摩擦により不明である以外は、全て回転ヘラ切り後未調整である。

小甕(8) 内外面ともに、丁寧な回転ナデ調整により仕上げている。小破片であり器種の限定には無理があるが、形状および内外面の調整の状況から小甕と推定した。

第Ⅲ層出土遺物 (Fig. 8 Pl. 18・19 Tab. 3)

9号窯跡の前庭部が欠失しており、直接的な関連を考えるには無理があるものの、最も9号窯跡に近く、関連する可能性が高いと考えられる堆積層であり、黒色灰層のみによって構成される土層である。この土層からは、須恵器、坏c・小坏c・蓋c 3・蓋2・小蓋a 3・壺蓋a・壺b、土師器、甕が出土している。

一須恵器一

蓋c 3(1~5) 口径13.2cm~13.75cm、器高1.05cm~2.3cmを測り、ツマミは全て偏平なツマミ形状を成している。しかしツマミ径は、直径2.7cmのものと(4・5)と、2.8cm~3.35cmを測るもの(1~3)がある。口縁端部形状は、明瞭な断面三角形を示すもの(1~3)、やや不明瞭な断面三角形を示すもの(4・5)に分けられる。さらに天井部から口縁部への移行は、屈曲しつつ口縁部へ移行するもの(1~4)と、緩やかに口縁部へ移行するもの(5)がある。天井部外面の処理は、全て回転ヘラ削りによって仕上げられており、内面は回転ナデ調整の後粗い不定方向のナデによって仕上げている。

小蓋a 3(7・8) 口径10.0cm・10.55cm、器高1.5cm・1.8cmを測り、口縁端部形状は明瞭な断面三角形を示している。天井部外面の処理は、回転ヘラ切り未調整であり、内面は回転ナデの後粗い不定方向のナデによって仕上げられている。天井部と口縁部の境界は明瞭に屈曲している。

壺蓋 a (6) 口径16.25cm、器高3.25cmを測り、天井部から明瞭に屈曲しつつ直立気味に口縁部へ至る形状を示している。口縁端部形状は、やや内傾する平坦面を形成しており、一回の回転ナデ調整によって仕上げられている。天井部外面は、丁寧な回転ヘラ削りによって処理されており、他の部分は全て丁寧な回転ナデ調整によって仕上げられている。

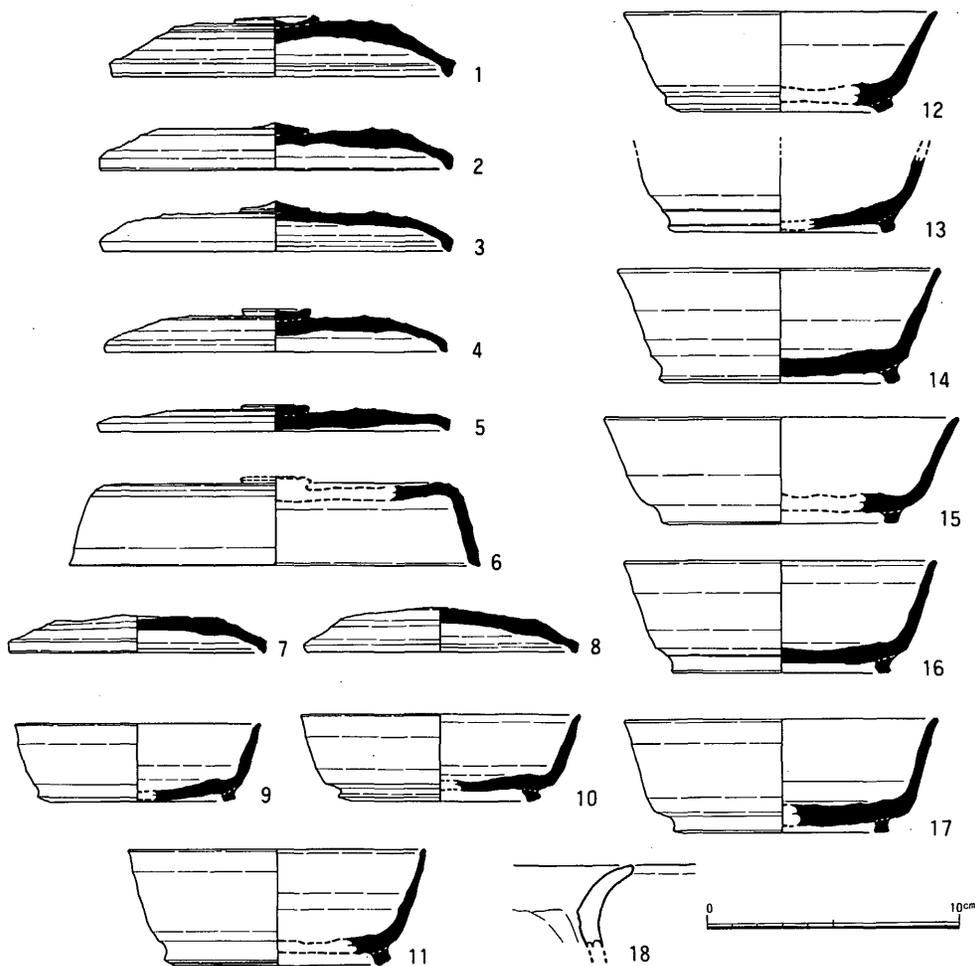


Fig. 8 第Ⅲ層出土遺物

小環 c (9・10) 口径9.65cm・11.0cm、器高3.1cm・3.45cmを測り、環 c 同様に直線的に直立気味に立ち上がり、高台の形状は外方へ張り出す正方形気味の形状を示している。また高台の接合状況は、体部から高台への移行が緩やかになされるもの(9)と、体部と底部の境界が明瞭な屈曲を有しているもの(10)がある。高台接合のための回転ナデ調整による稜線は両者とも明瞭である。底部外面の処理は、(9)が回転ヘラ切り後丁寧なナデによってナデ消しているのに対し、(10)は回転ヘラ切り後未調整である。

なお(10)は、焼成は良好であるが、還元の度合が不良な資料である。

坏c(11~17) 口径11.7cm~13.9cm、器高3.95cm~4.6cmを測り、底部より直線的に直立気味に立ち上がる。高台の形状は、正方形ないしは台形を呈している。高台の接合状況が、体部から高台への移行が緩やかになされるもの(11~15)と、体部と底部の境界が明瞭な屈曲をもち、底部中心よりも高台が貼付されるもの(16・17)がある。高台接合のための回転ナデ調整による稜線は、前者(11~15)が明瞭であり、後者(16・17)の方が不明瞭である。底部外面の処理は、全て回転ヘラ切りの痕跡をとどめているものの、その後粗いナデによって一部ヘラ切り痕跡が消されている。全体的に高台の接合は丁寧に仕上げられているものの、(14)については高台の粘土が体部側へ移動しておりやや粗雑に貼付されている。

—土師器—

甕a(18) 小破片であり器形の復元は困難であるが、頸部内面縦方向のヘラ削り、頸部ならびに口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面は横方向のハケによる調整によって仕上げられている。残存高3.15cmである。

第Ⅳ層出土遺物 (Fig. 9 Tab. 3)

第Ⅳ層からは、須恵器、坏c・碗・蓋c3・小蓋a3が出土している。主として、最下層である黒色灰層からの出土が顕著である。

蓋c3(1) 口径13.5cm、器高2.0cmを測り、ツマミが欠損している。口縁端部形状は、やや丸みのある断面三角形を呈し、口縁端部の処理は一回の回転ナデによって仕上げている。天井部から屈曲し口縁部へ至る。天井部外面の処理は、回転ヘラ削りによって仕上げており、内面の処理は回転ナデの後、粗い不定方向のナデによって仕上げている。還元不良な資料である。

蓋3(2) 口縁端部だけの破片資料であり、全体の形状ならびに調整に関しては不明であるが、やや長く下方へ伸びる口縁端部形状を有するものである。推定口径14.9cm、残存器高1.0cmを測る。

小蓋c3(3) 口径10.25cm、器高1.7cmを測り、天井部から屈曲しつつ口縁部へ至り、口縁端部形状はやや丸みを有するものの、明瞭な断面三角形を示している。天井部外面の処理は、回転ヘラ切り後未調整であり、内面は回転ナデ調整のみである。

坏c(4・5) (4)は口径12.65cm、器高4.4cmを測り、底部より直線的に直立気味に立ち上がる。高台形状は、台形の形状をとり、底部から体部への移行が屈曲によりやや明瞭であり、高台接合のための回転ナデによる稜線が不明瞭である。底部外面の処理は、回転ヘラ切り後未調整である。高台の接合痕跡を外面に明瞭にとどめる程、接合のための回転ナデ調整はやや粗雑である。底部内面は、回転ナデの後粗い不定方向のナデによって仕上げている。(5)は、残存高

2.3cmの底部から高台にかけての破片資料である。高台径は6.4cm、高台形状は偏平な台形を示しており、底部から体部への移行が屈曲によりやや明瞭である。また高台の貼付位置は、坯部中心よりに貼付されている。高台接合のための回転ナデによる稜線は、やや明瞭に底部ならびに高台部分に残存している。

椀(6) 口径17.0cm、残存高4.9cmを測る。やや内湾気味に外方へ立ち上がる形状を示し、口縁端部の回転ナデによる稜線が明瞭に残存している。還元不良な資料である。

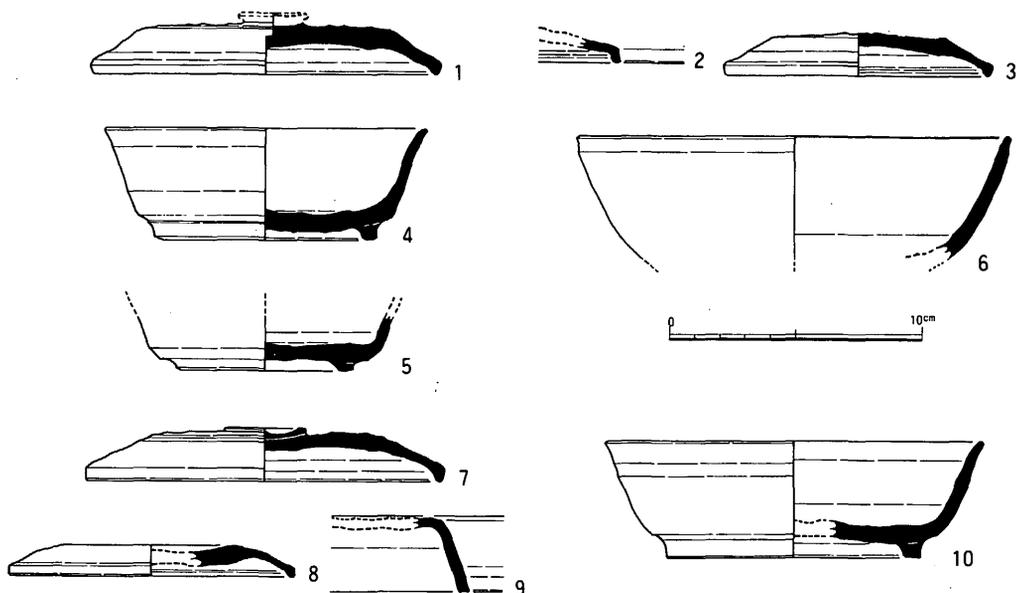


Fig. 9 第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物

第Ⅴ層出土遺物 (Fig. 9 Tab. 3)

第Ⅴ層からは、須恵器、坏c・小坏c・蓋c3・蓋a3・壺蓋a等が出土している。主として、黒色灰層である第Ⅴ-6・8層からの出土が顕著であった。

蓋c3(7) 口径13.9cm、器高2.1cmを測り、偏平なツマミを貼付しており、天井部からやや屈曲しつつ口縁部へ至る。口縁端部形状は、明瞭な断面三角形を示し、端部処理に2回の回転ナデ調整による処理を行っている。天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げている。ツマミ径は、3.3cmを測る。

小蓋c3(8) 口径11.2cm、器高1.25cmを測り、焼け歪みのためか天井部から口縁部への移行は、緩やかになされる。口縁端部は、断面三角形を呈しており、天井部外面は、回転ヘラ切り後未調整である。天井部内面は、回転ナデ調整後粗い不定方向のナデが施されている。

壺蓋a(9) 口径16.0cm、器高3.0cmを測り、平坦な天井部から屈曲し下方へ直線的に伸びる

体部形状を示す。口縁端部は、1回の回転ナデによって内傾気味に平坦に仕上げられている。
天井部外面は、回転ヘラ削りにより仕上げている。

坏c (10) 口径14.8cm、器高4.6cmを測り、底部よりやや丸みを持ちつつ直立気味に口縁部へ至る。高台の形状は正方形に近似しており、高台接合のための回転ナデ調整による稜線が、体

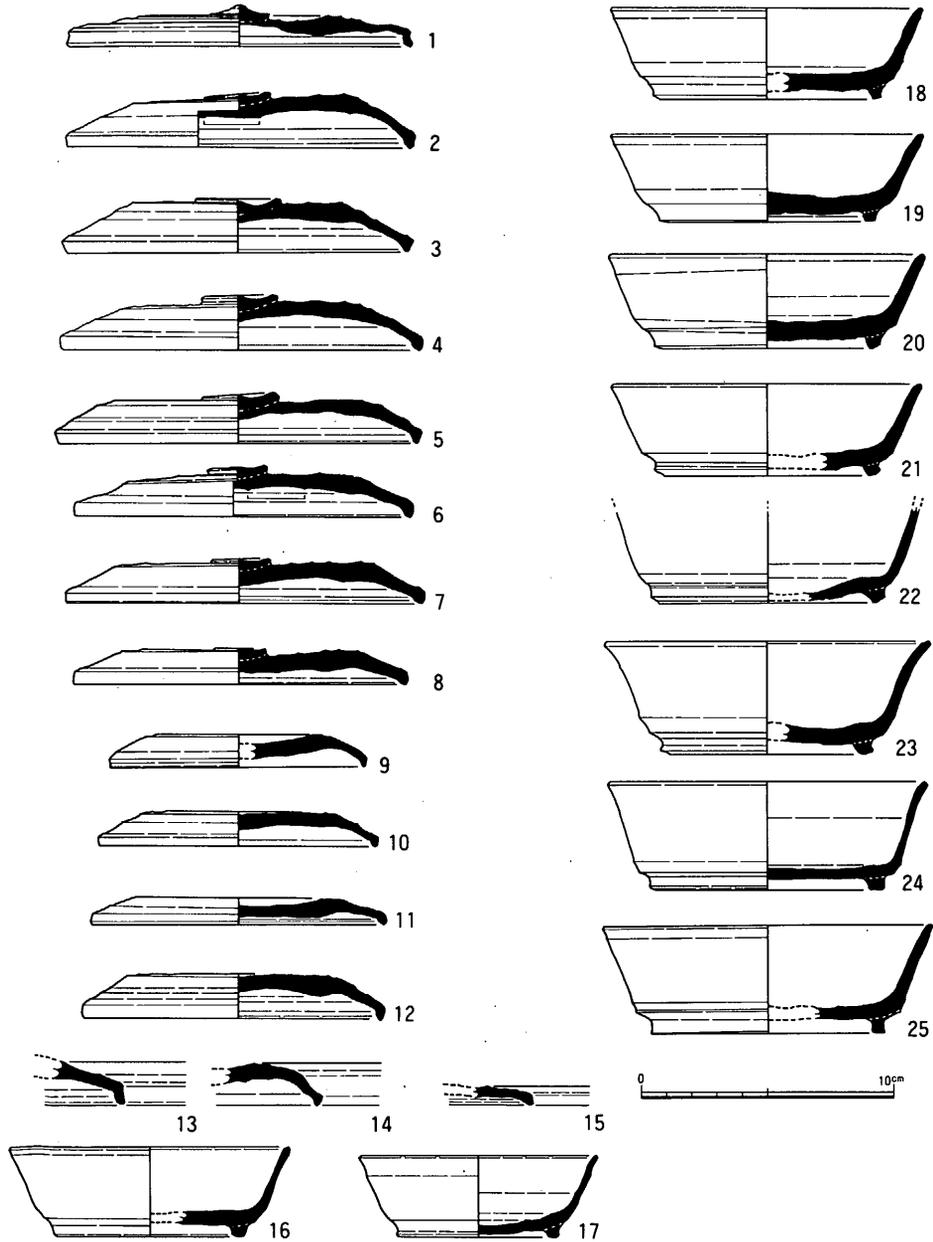


Fig. 10 第VI層出土遺物

部側は不明瞭であり高台部側は明瞭である。底部内面は回転ナデの後粗い不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラ切り未調整である。高台の接合は、丁寧に処理されている。

第Ⅵ層出土遺物 (Fig. 10 Pl. 19 Tab. 4)

第Ⅵ層からは、須恵器、坏c・小坏c・小蓋a3・蓋c3・壺・甕等が出土しており、主として黒色灰層である第Ⅵ-6層からの出土が顕著である。甕に関しては体部破片での出土であり、製品として9号窯跡にて焼成された可能性は薄い。他の用途に転用されたものと考えられる。

蓋c3(1~8) 口径13.1cm~14.2cm、器高1.4cm~2.2cmを測り、いずれも偏平なツマミを貼付している。天井部が平坦で口縁端部のみ屈曲によって独立している(1)を除いて、他の資料は全て天井部から屈曲しつつ口縁部へ至る形状を示している。また(1)は、中央部が隆起する偏平ツマミを貼付し、平坦な天井部からはほぼ直角に屈曲し下方へ伸びる口縁端部形状を示している。(12~18)は、明瞭な断面三角形の口縁端部形状を成している。口縁端部の処理は、調整痕跡の残存度合にもよるものの、(1~5・8)は2回の回転ナデによって仕上げており、(6・7)は1回の回転ナデによって仕上げている。天井部外面は、いずれも回転ヘラ削りによって最終調整をしており、内面には回転ナデ調整後の粗い不定方向のナデ痕跡が残存している。(2・6)の天井部内面には、重ね焼きの際溶着したと考えられる痕跡が残存している。その直径からツマミである可能性が高い。

小蓋a3(9~12) 口径10.0cm~11.6cm、器高1.1cm~1.75cmを測り、天井部から屈曲しつつ口縁部へ移行する形状をとる。口縁端部は、いずれも断面三角形を呈している。(11)については焼け歪みによって、同一個体内に断面三角形を呈する部位と、やや鈍く丸みをおびた断面三角形を呈する部分が観察できる。天井部外面の処理は、いずれも回転ヘラ切り後未調整である。

蓋3(13~15) 口縁端部だけの破片であり、全体の形状ならびに調整の細部については不明である。(13)は、下方へ伸びる口縁端部形状を示し、(14)はやや膨らみのある天井部から口縁部にて僅かに外方へ屈曲し、断面三角形の口縁端部形状を呈するものである。(15)は、僅かながら断面三角形をとどめているものである。

坏c(18~25) 器高3.6cm前後のもの(18~21)と、4.3cm前後のもの(22~25)の二種がある。前者は、口径12.15cm~12.3cm、器高3.45cm~3.7cmを測り、いずれも底部から直線的に外方へ立ち上がる形状をとっている。高台の形状は、正方形ないしは台形を呈している。底部から体部への移行が、高台接合のための回転ナデ調整によって不明瞭になっているもの(1・2)と、底部・体部の境界が明瞭な屈曲によってなされるもの(20・21)がある。ただし(20)に関しては、高台接合位置が底部中心円よりズレており、部分的には(18・19)の形状を取る部位もある。(18・19)は、高台接合のための回転ナデ調整による稜線が、体部ならびに高台に明瞭に残る。底部外面の処理は、回転ヘラ切り後丁寧なナデによってなされている。

後者は、口径12.4cm～12.9cm、器高4.25cm～4.45cmを測り、底部から直立気味に立ち上がるもの(22・24・25)と、底部から外反気味に立ち上がる形状を示すもの(23)がある。これは焼け歪みによる形状変化とも考えられるため検討が必要である。高台の形状は、正方形ないしは外方へ張り出す台形を呈しており、底部から体部への移行が、高台接合のための回転ナデ調整によって不明瞭になっているもの(22・23)と、底部・体部の境界が明瞭な屈曲によってなされるもの(24・25)がある。(22・23)は、高台接合のための回転ナデ調整によって生じる稜線が、体部ならびに高台に明瞭に残存している。底部外面の処理は、回転ヘラ切り未調整である。

小坏c(16・17) 口径11.0cm・9.3cm、器高3.5cm・3.2cmを測り、いずれも底部より直線的に外方へ立ち上がる。底部から体部への移行が高台接合のための回転ナデ調整によって不明瞭であり、それによって生じる稜線が体部ならびに高台側に明瞭に残存している。特に(17)に関しては、底部・体部の屈曲部分に高台を接合している。底部外面の処理は、回転ヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げている。

第Ⅶ層出土遺物 (Fig. 11 Pl. 19・20 Tab. 4)

第Ⅶ層からは、須恵器、坏c・蓋c3・小蓋a3・鉢b・横瓶・壺b・甕等が出土している。やはり他の土層と同様に、黒色灰層である第Ⅵ-5・6層からの出土が顕著である。

蓋c3(1～6) 口径12.7cm～15.2cm、器高0.8cm～2.9cmを測り、いずれも偏平なツマミを貼付している。形態は、平坦な天井部から口縁端部のみ屈曲によって独立している(1)を除いて、全て天井部から屈曲しつつ口縁部へ至る形状を示している。

(1)は、中央が隆起する偏平ツマミを貼付し、平坦な天井部からほぼ直角に屈曲し下方へ伸びる口縁端部形状を呈している。(2～6)は、前述した天井部ならびに口縁部形状を呈し、断面三角形の口縁端部形状を示している。いずれの資料も天井部外面の処理は、回転ヘラ切り後回転ヘラ削りによって仕上げている。また天井部内面の処理は、回転ナデの後不定方向のナデによって最終調整がなされている。

蓋1(7) 口縁端部のみ破片資料である。口縁端部内面にかえりを有するもので、内外面ともに回転ナデ調整によって仕上げられている。

蓋3(8) 口縁端部のみ破片資料である。口縁端部形状が僅かながら断面三角形をとどめているものである。

小蓋a3(9・10) 口径10.7cm・10.85cm、器高1.15cm・10.85cmを測り、天井部から屈曲しつつ口縁部へ移行する形状をとる。口縁端部は、いずれも断面三角形を呈している。天井部外面の処理は、いずれも回転ヘラ切り未調整である。

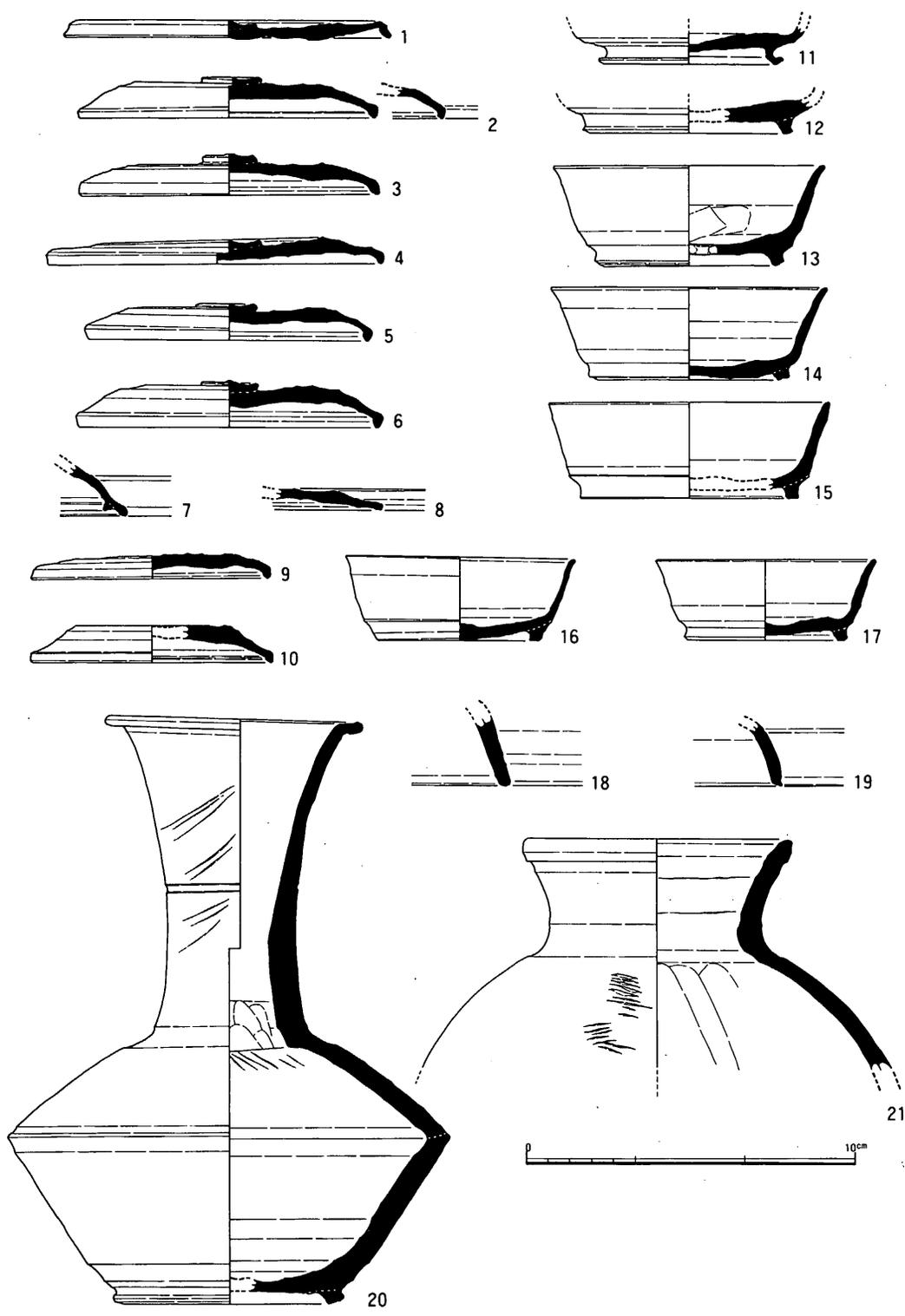


Fig. 11 第Ⅶ層出土遺物

壺蓋 a (18・19) 口縁端部のみの破片資料である。口縁部形状が丸みを有するもの(19)、直線的な口縁部形状を呈するもの(18)がある。両者とも、口縁端部内面を内傾気味に平坦に仕上げるものである。

坏 c (11~15) 図上完形になる(13~15)は口径12.3cm~12.7cm、器高4.0cm~4.1cmを測る。いずれも底部から外方へ立ち上がる形状をとっている。高台形状を見ると(13・14)は、外方へ張り出す断面正方形を呈し、(15)はあまり張り出さない断面正方形の形状をとる。底部から体部への移行は、高台接合のための回転ナデ調整によって不明瞭ながら体部外面に僅かに稜線を有するもの(13)と、高台接合のための回転ナデ調整によって不明瞭なもの(14)、また高台貼付位置が坏中心へ移動することによって、高台接合部ならびに坏底部-体部の境界に明瞭な屈曲を有するもの(15)がある。

破片資料として高台のみの資料をあげておく。(11)は、外方へ屈曲しつつ張り出す形状を呈するもので、(12)は外方へ張り出し断面正方形を呈する形状をとるものである。

確認できる資料での底部外面の処理は、回転ヘラ切り後未調整である。なお(13)は、焼成前に穿孔を施した痕跡がうかがえる。

小坏 c (16・17) 口径10.3cm・9.9cm、器高3.9cm・3.7cmをそれぞれ測り、いずれも底部より直線的に外方へ立ち上がる。(16)は、底部から体部への移行が高台接合位置ならびに接合のための回転ナデ調整によって不明瞭であり、それによって生じる稜線が体部外面に明瞭に残存している。(17)は、底部から体部への移行が高台接合位置ならびに坏底部-体部の境界部分に明瞭に残存しており、僅かながら高台接合のための回転ナデ調整に伴う稜線が体部外面に残存している。いずれの個体も底部外面の処理は、回転ヘラ切り後未調整である。

壺 b (20) 口径11.25cm、器高26.7cm、体部最大径19.9cmを測る。形態の特徴は、やや外方に張り出す高台を貼付し、膨らみを有し算盤玉様の形状を示す体部から、やや開き気味に直立する頸部へと続く。口縁部は、外方へほぼ直角に屈曲している。

成形ならびに調整は、高台接合位置よりやや上部付近から下方へ回転ヘラ削りを施し、他の部位は内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。成形のための接合部位は、体部屈曲部ならびに体部と頸部の屈曲部分である。体部屈曲部内面において接合のための回転ナデ痕跡が確認できることから、体部成形後頸部を接合したものと考えられる。

横瓶(21) 口径11.9cm、器高10.6cmを測るもので、破片資料であるため壺様の形態に復原されている。形態は、やや丸みを有する体部から頸部にて外方へ屈曲し、僅かに肥厚する口縁端部形状を示す。体部外面に平行タキの痕跡をとどめ、体部内面は縦方向のナデにより仕上げられている。頸部ならびに口縁部は内外面ともに、回転ナデ調整によって仕上げられている。焼成ならびに還元状態が不良である。

第Ⅷ層出土遺物 (Fig. 12 Pl. 20 Tab. 4)

第Ⅷ層からは、須恵器、坏c・小坏c・小蓋a3・蓋2・蓋c3・壺・壺蓋a・甕、土師器、甕等が出土している。第Ⅷ層は、さほど炭化物を混入しない土層であり、遺物の出土量も上位の各土層に比して減少している。

—須恵器—

坏c(8) 体部～口縁部の破片資料であり、口径11.9cm、残存高3.55cmを測る。丸みのある底部-体部の境界から直線的に上方へ立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整によって仕上げられている。

蓋c3(1~4) 口径12.9cm~13.7cm、器高1.15cm~2.25cmを測る。形態は、偏平なツマミを貼付し、平坦な天井部から屈曲によって体部ならびに口縁部が独立しており、断面三角形の口縁端部形状を示している。天井部外面の最終処理は、回転ヘラ削りによって成され、天井部内面は回転ナデ調整の後粗い不定方向のナデによって仕上げられている。(4)は、他の資料に比して各部に丸みを有する特徴がある。

小蓋a3(5) 口径11.2cm、器高1.3cmを測り、天井部から僅かに屈曲しつつ口縁部へ移行する形状をとる。口縁端部は、断面三角形を呈している。天井部外面の処理は回転ヘラ切り後未調整である。

蓋3(6・7) 口縁部だけの破片資料であり、調整の細部については不明である。(6)は、下方へ伸びる口縁端部形状を有し、(7)は、やや丸味をおびた断面三角形を呈するものである。

—土師器—

甕(9) 僅かに屈曲する頸部形状を示し、口縁端部を丸く仕上げている。体部内面のヘラ削り痕跡を確認できる他は、器面摩耗のため不明確である。

第Ⅹ層出土遺物 (Fig. 12 Tab. 5)

第Ⅹ層からは、坏c・蓋c3・壺bが出土している。第Ⅹ層もⅧ層の状況と同様に炭化物をあまり含まず、出土遺物もさらに減少する。

蓋c3(10~12) 口径13.25cm~14.5cm、器高2.1cm~2.4cmを測る。形態は、偏平なツマミを貼付し、平坦な天井部から屈曲によって体部ならびに口縁部が独立しており、断面三角形の口縁端部形状を示している。天井部外面の最終処理は、回転ヘラ削りによって成されている。(2)の口縁端部は、やや下方に伸びる口縁端部形状を示している。

坏c(13) 口径12.35cm、器高4.3cmを測り、やや緩やかな底部-体部の移行形状を示し、直線的に外上方へ立ち上がる体部形態を有している。高台形状は、断面台形を呈している。底部か

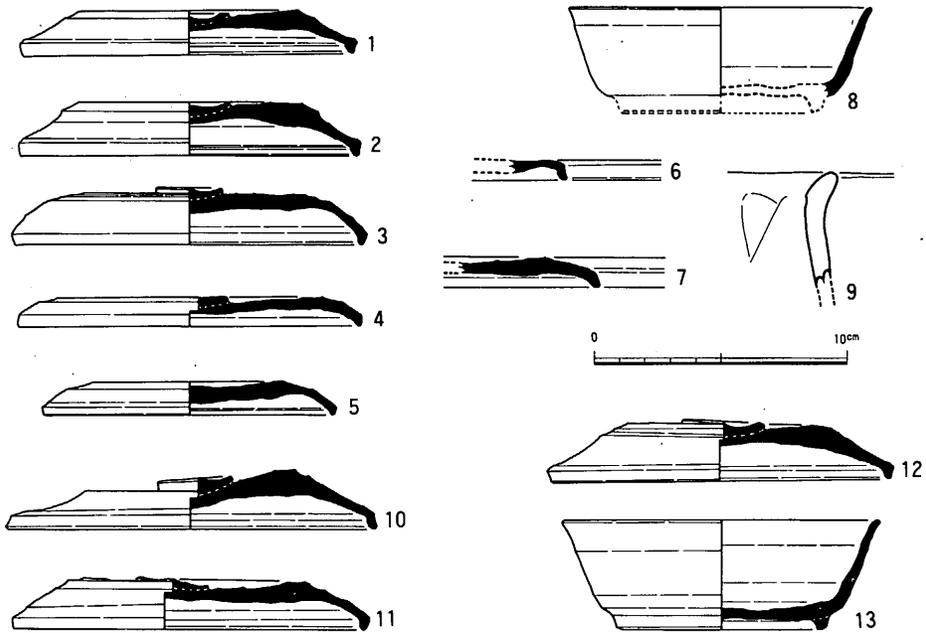


Fig. 12 第Ⅷ・Ⅹ層出土遺物

ら体部への移行は屈曲によってやや明瞭であり、高台接合のための回転ナデ調整による稜線が体部外面に明瞭に残存している。底部外面の処理は、回転ヘラ切り後未調整であり、高台接合に先だって回転ヘラ削りにより底部-体部の屈曲部の面調整を成している。

灰原出土資料 (Fig. 13・14 Pl. 20・21)

灰原分層前に出土した資料で、出土資料組成を考える上における補足資料として以下に記述する。また小破片であるため器種については不明確であるが、鉄製品の破片が出土している。

蓋 c 3 (1~10) 口径12.0cm~15.2cm、器高1.2cm~2.7cmを測る。形態は、いずれも偏平なツマミを貼付し、天井部から屈曲しつつ口縁部へと移行する形状を基本形態としている。口縁端部形状は、断面三角形を基調としつつ端部屈曲後の長短に差異がある。(1)は下方へ伸びており、それ以外の資料は全て短い断面三角形の形状を有している。天井部外面の処理は、(10)が回転ヘラ切り後未調整である以外は、全て回転ヘラ削りによって仕上げている。

小蓋 a 3 (11~18) 口径10.1cm~11.9cm、器高1.1cm~1.85cmを測り、平坦な天井部から屈曲しつつ口縁部へと至る。口縁端部形状は、断面三角形を呈しており、長短の差異がある。(11・12)は、下方に伸びる口縁端部形状を有しているのに対し、(13~18)は、短い断面三角形の形状を示している。天井部外面の処理は、回転ヘラ切り後未調整である。また(11)は、天井

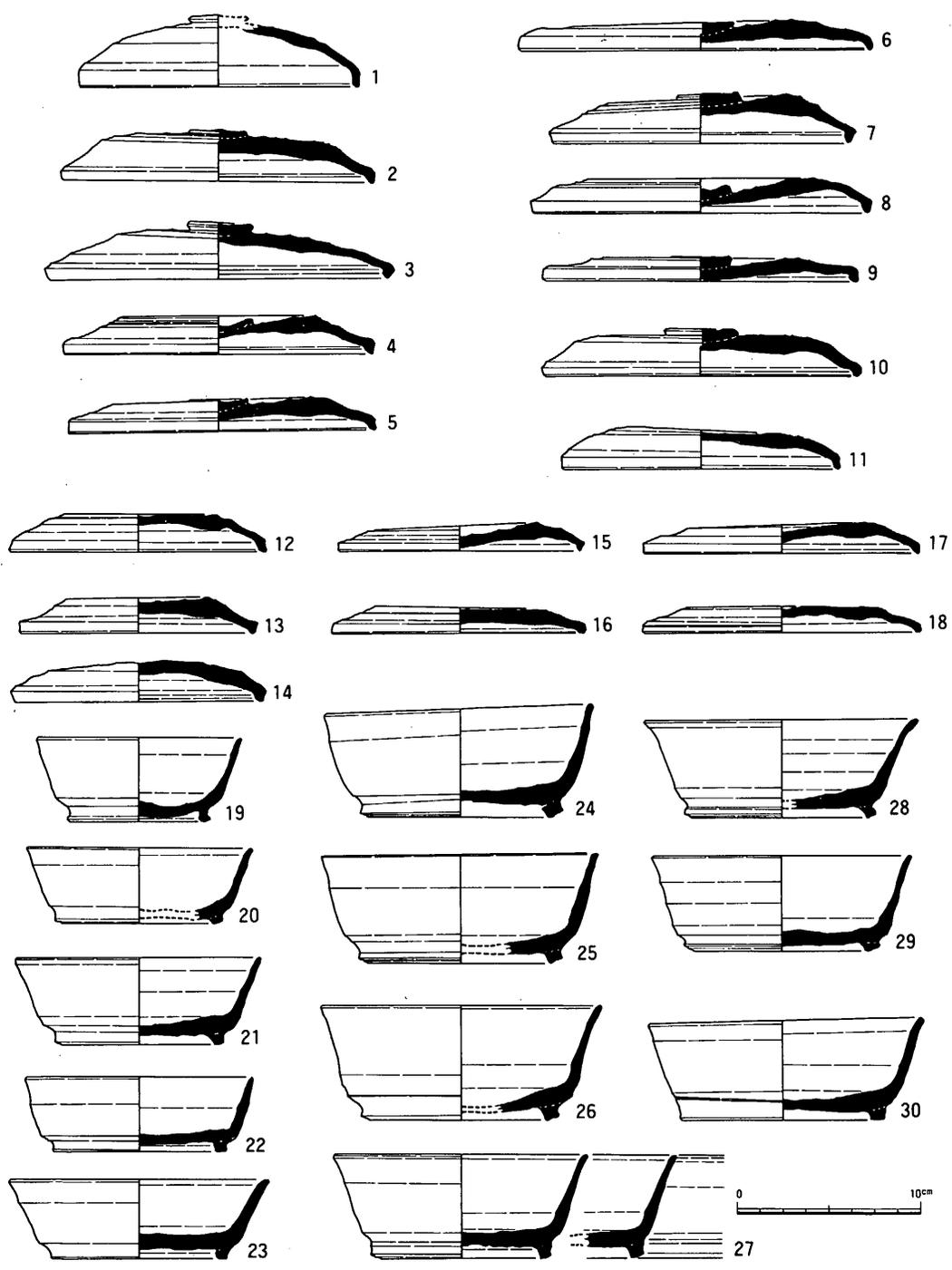


Fig. 13 灰原出土遺物 (1)

部外面に残存部で直線のヘラ記号を有している。

小坏c (19・20) 口径8.8cm・9.75cm、器高3.3cm・3.7cmを測り、底部より直線的に外上方へ立ち上がる体部形状を有している。底部から体部への移行は、高台接合のための回転ナデ調整によって不明瞭になっており、それに伴って生じる稜線が(19)は、体部および高台に明瞭に残存し、(20)は体部側のみに僅かに残存する程度である。また高台形状に関しては、(19)が長くやや外方へ張り出す形態であるのに対し、(20)は断面台形の形状を取る。底部外面の処理は(19)のみ確認でき、回転ヘラ切り後未調整である。

坏c (Fig. 13-21~30, Fig. 14-1~8) 口径11.5cm~13.4cm、器高4.0cm~5.0cmを測り、底部より直線的に直立気味に立ち上がる。高台の形状は、正方形ないしは台形を示し、i) 外方へ張り出すもの (Fig. 13-21・24~29)、ii) 直立するもの (Fig. 14-30・Fig. 14-1・2・7)、iii) 内傾気味のもの (Fig. 13-13・Fig. 14-3~6) がある。高台の接合状況は、i) が体部から高台への移行が緩やかになされるもので、高台側に接合のための回転ナデ調整に伴う稜線が明瞭に残る。ii) は、底部と体部の屈曲が観察でき、高台接合のための回転ナデ調整に伴う稜線も体部側にやや明瞭に残っている。iii) は高台の貼付位置が坏中心部に僅かに寄る形態を取り、高台接合のための回転ナデ調整に伴う稜線は顕著ではない。底部外面の処理は、回転

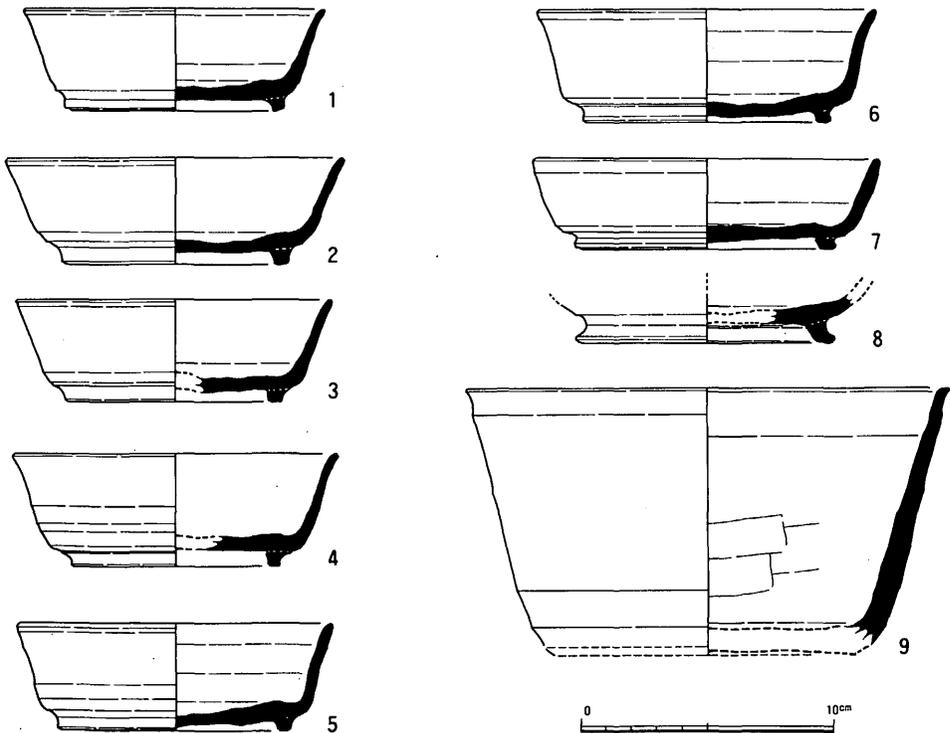


Fig. 14 灰原出土遺物 (2)

ヘラ切り痕跡をとどめているものの、その後粗いナデによって部分的にヘラ切り痕跡が消されている。高台接合のための回転ナデ調整は後者へゆくほど粗雑になっている。

鉢 b (Fig. 14-9) 口径19.0cm、残存高10.1cmを測る。直線的に外方へ開く体部形態を有し、口縁端部を平坦に仕上げている。内外面ともに、丁寧な回転ナデ調整によって仕上げている。

②焼土壙

1. 遺構

9号窯跡によって形成された、灰原の下位に平面形が長方形を呈する焼土壙を2基検出した。立地は、丘陵裾部の谷中央付近に形成されている。検出状況は、9号窯跡に明らかに伴うと考えられるX層の下位に、無遺物の土層であるXI層が堆積しており、そのXI層を除去した段階で4SX001・4SX002を検出した。検出した2基の焼土壙は、前者が標高的に上位に所在しているが、ほぼ谷の平坦化した部分に2基共に形成されており、2基相互の関係も約3.0m程しか離れていない。これら2基の焼土壙の周囲には、炭化物を多量に混入した堆積物(第XII層)が確認できる。

4SX001 (Fig. 15 Pl. 16)

長軸長0.76m、短軸長0.43m、検出面からの深さ0.45mを測り、遺構内埋土の状況は、床面付近に約0.05m程度の炭化物層が堆積しており、上位には流れ込みに伴うと考えられる黄色砂質土が堆積している。遺構壁面のみが還元状態にまで焼き締められており、床面は基盤層の状態を保っている。焼き締められた範囲は、遺構壁面内部から約0.05m程度外側まで達している。内面ほど還元状態が強く看取できる。出土遺物は無い。

4SX002 (Fig. 15 Pl. 16)

長軸長1.06m、短軸長0.5m～0.58m、検出面からの深さ0.35mを測り、遺構内埋土の状況は、4SX001同様に約0.02m～0.05mの層厚を示す炭化物層が堆積しており、上位には流れ込みと解することのできる黄色砂質土層が堆積している。遺構内面の焼き締め状況は前述した4SX001と同様の状況を示している。出土遺物は無い。

③小結

調査の結果、須恵器焼成のための登り窯1基(9号窯跡)と、登り窯によって形成された灰原の下位に焼土壙2基を検出した。焼土壙からは、遺物の出土は無かったものの、灰原形成以前であることは、事実として確認できる。また灰原出土資料からは、坏・蓋類が圧倒的に占めており、小型品中心に製作・焼成された窯と推定できる。

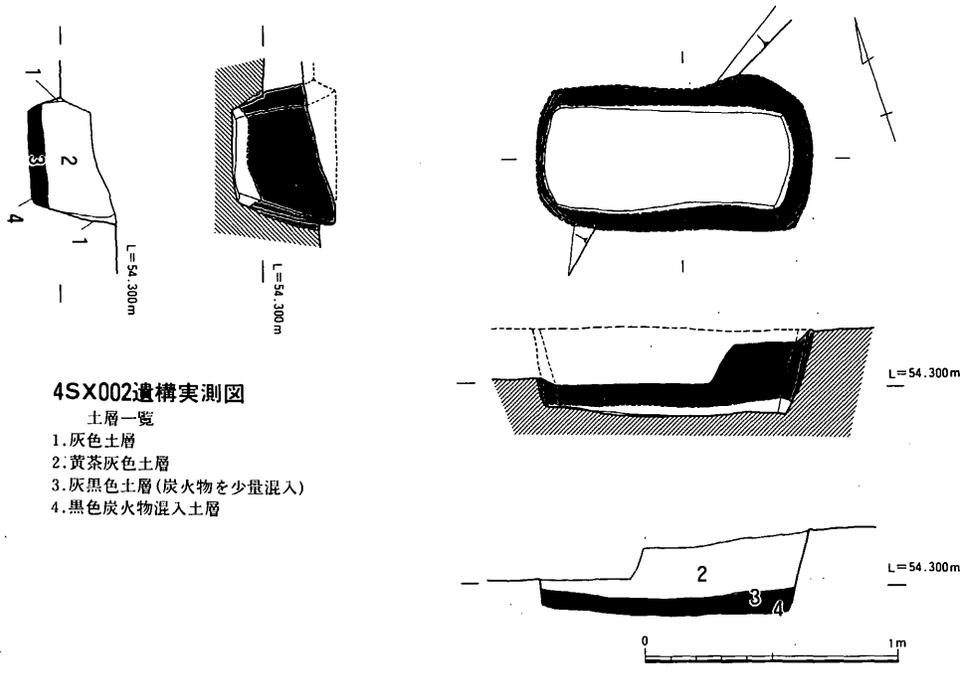
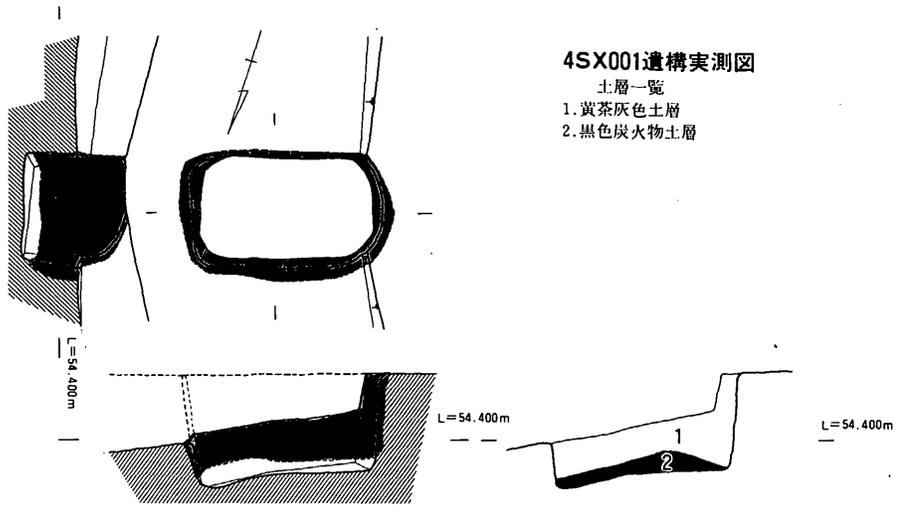


Fig.15 烧土坑遺構実測図 (S=1/30)

IV. 成果と問題の所在

宮ノ本遺跡 第3・4次調査の所見に関して諸事象を述べてきた。

第4次調査では、調査範囲に比して遺構の検出密度は低い状況であったにもかかわらず、窯業遺跡としての宮ノ本遺跡のもつ生産遺跡としての一面を把握できた。さらには性格不明ながらも、焼土壙を9号窯跡によって形成された灰原の下位より検出でき、焼土壙の一側面を確認できたと考えている。そこで、今次調査にて確認した生産の場である宮ノ本遺跡 9号窯跡の有する成果と問題点をまとめ、さらに焼土壙の性格について考えられる事象について所見を述べてみたい。

① 9号窯跡の位置付け

a. 時間軸上での位置付け

9号窯跡から出土した遺物は、前述したように主として灰原より出土している。出土した遺物の中で蓋c3・小蓋a3・坏cが、出土総点数の過半数以上を占めている。ここで9号窯跡の操業時期を、出土した遺物から検討を加えてゆくことにするが、今次調査における灰原出土資料の持つ限界としては、灰原は焼成失敗品の廃棄の場であることから、焼成器種組成ひいては操業時期決定の基礎資料となる組成の問題に関しては、言及できないという限界を有している²⁾。そこでここでは、最も多くを占めている須恵器・坏cならびに須恵器・蓋c3についての分類と系譜関係について、整理過程において思考した事象に基づき述べてみたい。さらに、消費遺跡において出土している須恵器の傾向から、時間軸への位置付けを考えてみたい。

— 須恵器・坏c —

坏cという分類単位呼称については、学史を踏まえるならば系譜に基づくべき形式概念を無視した形で用いられている²⁾。ここで用いてきた坏c呼称に関しては、高台付き坏という程度に把握していただきたい。今次調査においては、丸みのある体部形態を有し高台高が高いものは、極微量ながら破片資料として出土している。しかしあくまでも破片資料であるため、元来9号窯跡において焼造されたものであるのかについては、可能性の問題として共伴事例の考慮によって解決されるべきものである。

今次調査で出土した坏cの有する各属性は、報文中において述べてきたところである。さてこれら坏cの分類に関してであるが、坏cの持つ属性のうち時空間軸上での分類標識となり得る属性に関しては、先学諸氏によって以下に抽出した属性が示されている。

- a. 底部から口縁部への立ち上がりの形状（体部形態）
- b. 高台貼付状況（接合位置ならびに形状）
- c. 高台接地位置

d. 底部外面の処理

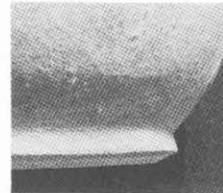
これらの諸属性の中で今次調査において出土した坏cは、主として直線的に口縁部へいたる体部形態を有するもののみによって構成されており、a.) 体部形態においての差異を明確にし難い。また、c.) 高台接地位置に関しては、灰原出土資料中において概略の傾向はおさえられるものの、焼成時の歪みによって接地位置が本来の形状をとどめているものであるのかという問題が生じる。特に破片資料では、属性として抽出でき得るものであるのか、検討が困難な場合が多々存在している。したがってここでは、b.) 高台貼付技術によって生じる形態の差異、d.) 底部外面の処理に着目して考えてゆく³⁾。その概要について以下に記述するが、分類単位の資料の提示として便宜的に1・2・3・4…にて記述する。

b.) 高台貼付状況

1. 灰原出土資料 (Fig. 13-15 Pl. 21-30) を基準とする形態である。坏部における体部-底部の境界に高台を貼付しており、高台接地のための回転ナデによる稜線が体部側に僅かに残存し、高台側に明瞭に残るものである。またこの形態の特徴は、高台接合位置の関係から底部-体部の境界ならびに体部-高台の境界が不明確になっていることであり、丸い接合部形態を示している。さらに高台接合後、高台接地部分を強めに回転ナデすることによって、凹部を形作るとともに、外方へはね上げる形態を有している (Fig. 16 Pl. 1)。



Fig. 16 形態属性-1

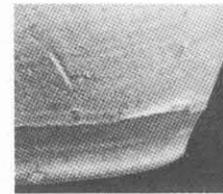


Pl. 1 形態属性-1

2. 灰原Ⅱ層出土資料 (Fig. 7-11) を基準とする形態である。坏部における体部-底部の境界に高台を貼付していることは、前記の1.)と同様であるが、高台接合のための回転ナデによる稜線が、体部側に明瞭に残存しており高台側には不明瞭である。この型式の特徴は高台接合位置から、体部-高台への移行が屈曲無しに成されており、外面形態上高台接合のための回転ナデによって生じている稜線によって画されているにすぎない。高台接地部分の回転ナデは、ほとんど意識されておらず内傾し丸く仕上げられている (Fig. 17 Pl. 2)。



Fig. 17 形態属性-2



Pl. 2 形態属性-2

3. 灰原出土資料 (Fig. 13-17 Pl. 21-31) を基準とする形態である。坏部における体部-底部の境界に高台を貼付していることは、前記の1.)と同様であるが、高台接合のための回転ナデによる稜線が体部・高台ともに不明瞭である。この形態の特徴は高台の接合位置からくる、体部-高台への移行が前記1.)に比して高台接合位置の屈曲によって画されるものの、後述する

諸形態に比して高台から体部へ、坏底部の屈曲無しに移行していることにある。また高台の外方への張り出しを生じる、高台接地部分の回転ナデ調整は強く行われなくなり、凹部の形成も弱い (Fig. 18 Pl. 3)。ただしこの形態に関しては、分類標識としている属性に問題が無いわけではない。つまり、高台の坏底部への接合位置によって、後述する諸形態に分類されかねないという個体も存在している。高台接合技術の精粗に起因するものであるが、丁寧に接合されたものに関しては、この形態に考えられるものが存在している。

4. 灰原出土資料 (Fig. 14-2) を基準とする形態である。底部-体部の屈曲より極僅かに底部中心側へ、高台を貼付しているものである。高台接合のための回転ナデによって生じる稜線が、体部ならびに高台側へやや明瞭に残存している。

高台から体部への移行が、高台接合位置に生じている屈曲ならびに底部-体部の屈曲を経て成されており、高台の形状も高台接地部分の強い回転ナデによって凹部を形成し、外上方へ僅かにはね上げられる形態を取っている (Fig. 19 Pl. 4)。

5. 灰原出土資料 (Fig. 13-21 Pl. 20-29) を基準とする形態である。高台の接合位置は、前記4.)と同様であるが、高台接合のための回転ナデに伴う稜線が体部側にやや明瞭に残存し、高台側には不明瞭になっている。高台から体部への移行は、底部-体部の屈曲のみによって画されている。後述する6.)資料との差異は、高台高が僅かに高く、高台接地部分への回転ナデによって高台断面形状が台形を呈し、僅かに外方へ張り出しているところにある (Fig. 20 Pl. 5)。

6. 灰原出土資料 (Fig. 14-3 Pl. 21-35) を基準とする形態である。高台の接合位置は、前記4.)と同様であるが、高台接合のための回転ナデに伴う稜線が体部・高台ともに不明瞭になっている。高台から体部への移行は、底部-体部の屈曲のみによって画されており、鋭さが

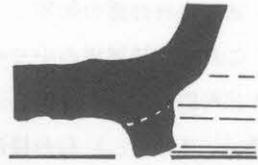
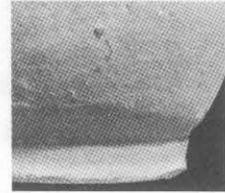


Fig. 18 形態属性-3



Pl. 3 形態属性-3

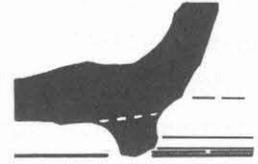
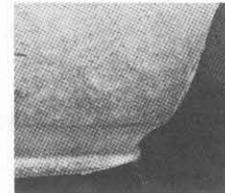


Fig. 19 形態属性-4



Pl. 4 形態属性-4

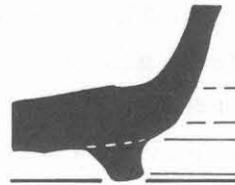


Fig. 20 形態属性-5



Pl. 5 形態属性-5



Fig. 21 形態属性-6



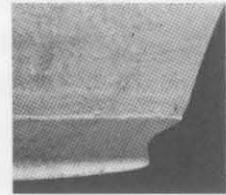
Pl. 6 形態属性-6

欠失してしまった形態的特徴を有する。また高台断面形状は、正方形に近い形状を呈しており、内傾しつつ丸みをもって仕上げられている (Fig. 21 Pl. 6)。

7. 灰原Ⅵ層出土資料 (Fig. 10-25 Pl. 19-12) を基準とする形態である。高台の接合位置は、前記4.)~6.)よりも坏底部中心側に貼り付けているものである。高台接合のための回転ナデに伴う稜線が、体部および高台側に明瞭に残るもので、高台から体部への移行は、高台接合部ならびに底部-体部の屈曲によって画される特徴を有している。高台断面形状は正方形を呈しており、直立ないしは内傾する形態を示している (Fig. 22 Pl. 7)。



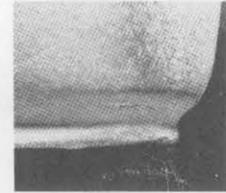
Fig. 22 形態属性-7



Pl. 7 形態属性-7



Fig. 23 形態属性-8



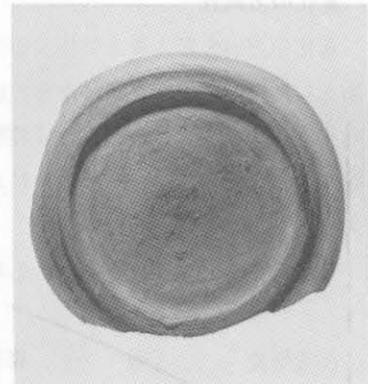
Pl. 8 形態属性-8

8. 灰原出土資料 (Fig. 14-6 Pl. 21-36) を基準とする形態である。高台の接合位置は、前記7.)と同様の箇所に貼り付けられているものである。高台接合のための回転ナデに伴う稜線が、体部ならびに高台ともに不明瞭であり、丸みを帯びた形態を示す。したがって高台から体部への移行は、前記7.)と同様であるものの鋭さが欠失した形状を呈している。また底部内面に残存している高台接合のための回転ナデが、粗雑に成されており部分的に剝離している箇所を観察できる。高台断面形状に関しても、丸みを帯びた正方形を呈している (Fig. 23 Pl. 8)。

各分類単位として8分類を提示したわけであるが、高台貼付位置によって大きく3種に統合できる可能性がある。つまり1)~3)の群・4)~6)の群ならびに7)・8)の群である。各々群の出土傾向は、4)~6)属性を有している個体が多数を占め、ついで1)~3)属性によって構成される個体が占めている。7)・8)属性に関しては、前2者に比して微量に存在しているだけである。具体的な数値は、分析総点数216点中において1)~3)属性によって構成される破片数82点 (約38%)、4)~6)属性を有している破片数120点 (約56%)、7)・8)属性によって構成される破片数14点 (約6%)を各々数える⁴⁾。

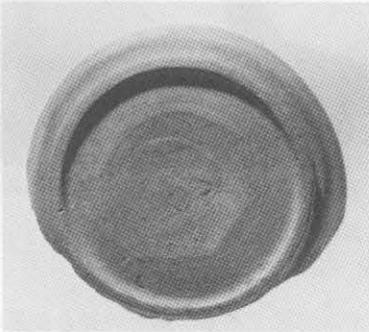
d.) 底部外面の処理

底部外面の処理は、大きく2工程が看取できる。つまり i) 回転ヘラ切り後ナデないしはケズリによる、回転ヘラ切り痕跡の消失が観察できるもの (Pl. 9)。ii) 回転ヘラ切り後未調整のものである (Pl. 10・11)。i) に関しては、ナデないしはケズリ工程を考慮しての分類で

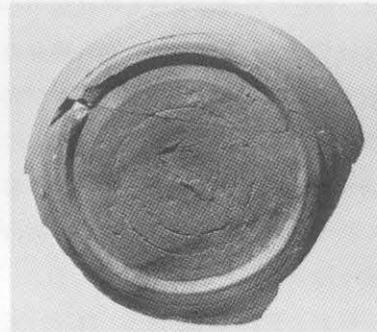


Pl. 9 底部外面の処理-(i)

あるが、回転台を利用した処理であるのか否かについて、回転ヘラ切り痕跡が摩耗に伴う消失とは異った状況で、不明瞭に残存している程度の資料があり、今後検討が必要となってくる。今回は回転ヘラ切り後さらに処理しているのか否かを分類標識とした程度にとどめておく。出土傾向としては、i) 属性が多数を占めている傾向を示しており、ii) 属性は少数しか存在しない。しかし i) 属性中においてヘラ削りによって最終処理を行ったと看取できる資料は、極微量にすぎない。



Pl. 10 底部外面の処理-(ii)



Pl. 11 底部外面の処理-(ii)

属性の相関

さてb.)属性とd.)属性の相関関係については、高台破片の残存率が口縁部破片資料の残存率に次いで高いものの、底部処理まで観察できる資料となると数が限られてくるのが、9号窯跡灰原出土資料の限界である。しかし数の少ない資料からの観察では、明瞭な相関関係は存在していないようである。したがって今次調査において出土した坏cの細分は、b.)属性の抽出に基づいた分類が有効であると考えられ、b.)属性が型式に直接結び付くものと考えられる。

次に各々の細分単位の層位ごとの出土傾向から、9号窯跡灰原出土資料における変化の方向性について探ってみる。

変化の方向性

変化の方向を考える上で作業前提となることに、出土層位の検討を行わなければならない。出土した層の性格が、窯跡からの廃棄堆積物によって構成され、丘陵傾斜面に堆積しているということから、一次堆積物とは性格が異なっている。しかし今次調査において検出した、灰原層の堆積状況に関しては、前章において詳述したように下位に堆積しているものほど古いと考えられる状況を示している。

さてこれらの堆積層から出土した各群の、出土傾向を示すと以下の様になる。

出土層位	X層	VIII層	VII層	VI層	V層	III層
1)~3)群	0	21(68%)	37(35%)	13(29%)	0	11(38%)

4)～6)群	1	8(26%)	63(58%)	30(67%)	1	17(59%)
7)・8)群	0	2(6%)	9(8%)	2(4%)	0	1(3%)

この表から概略的にはあるが、上位へ向かうほど1)～3)群と4)～6)群の比率が逆転するという傾向を示している。それに対して、7)・8)群の存在は極微量ながら安定量出土している。しかし7)・8)群は、各層位ごとの出現頻度を考慮できるほどの出土数ではないため、捨象できる範囲として把握できなくもない。いずれにしても1)～3)群と4)～6)群の変化の方向は、前者から後者への方向が想定できる。したがって、分類単位の解説において示したことを考慮すると、手抜き方向が看取できることになる。

さて大きく群としての方向性については、いま述べてきたとおりである。しかし各々の分類単位ごとの変化の方向性に関しては、出土点数に限界があり定量分析に耐え得るだけの点数が層位ごとに出土していない。したがってここでは、前述した手抜き方向性を作業前提とし、高台接合のための各処理工程ならびにそれによって生じる形態上の特徴から右に示す系列を考えてみた。また説明の関係から、9号窯跡灰原出土資料に形態的に近似し、かつ接合処理が丁寧に仕上げられていると考えられる、宮ノ本遺跡第1

次調査1号窯跡出土資料ならびに2号窯跡出土資料を加味した系列を示した (Fig. 24)。この系列は、高台接合位置ならびに高台接合処理に系譜属性をおいた系列となる⁹⁾。補足資料である宮ノ本遺跡第1次調査1号窯跡出土資料ならびに2号窯跡出土資料に関する観察項目は、補足観察表として付記しておいた (Tab. 5)。

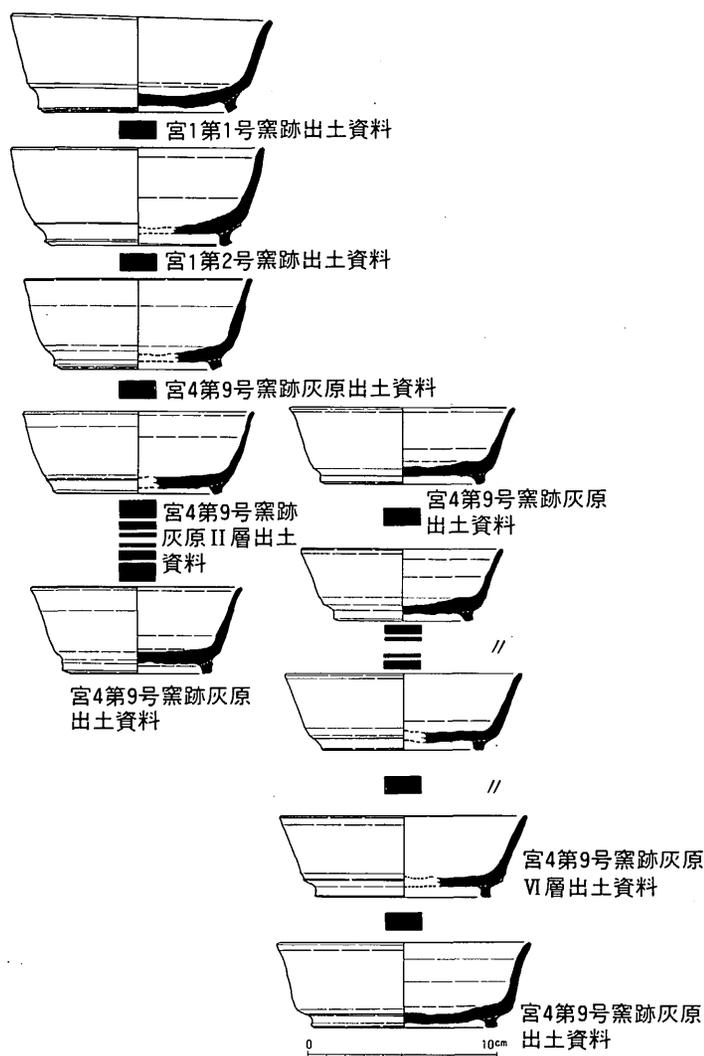


Fig. 24 環cの系列図

一須恵器・蓋c3-

須恵器・蓋c3に関する分類標識は、坏c同様に様々なかたちで成されてきた。その主な視点について以下に示す。

- a. 法量
- b. ツマミ形態
- c. 口縁部形態
- d. 天井部から口縁部への移行形態
- e. 天井部外面の処理
- f. 焼成状況の良・不良

これらの分類標識を、今次調査において出土した蓋c3に関して適用するならば、全ての属性に適用できる分類標識であるものの、a.)法量に関しては、口径 $13\text{cm} \leq \phi \leq 15\text{cm}$ を主流としており、極微量にこの範囲外に出る個体が存在している。しかし、破片資料での計測が 13cm 以下の口径を測るものであるため、今次調査における蓋c3の口径分布中心は、上記の範囲内に納まるものと考えられる。平均口径は、 13.68cm を測る。出土層位と法量との相関関係は無く、通時的に同じ法量が製作されたものと解される。したがって法量属性に関しては、蓋c3の細分には有効ではない。またd.)天井部から口縁部への移行形態については、焼成時の歪みによる形態変化を生じているものもあり、天井部と口縁部が屈曲によって画されるものであるのかについては、今後検討してゆきたい。さらにf.)焼成状況の良・不良に関しては、灰原出土という焼成失敗品であるにもかかわらず、焼成状況は良好な資料が大多数占めており、分類標識としては有効ではない。したがって、上記6属性のうち今次調査において出土した蓋c3を細分するのに有効であると考え、3属性について検討を加える。

b.) ツマミ径を含めたツマミ形態に関しては、ツマミ径 i.) $2.5\text{cm} \leq \phi$ もの、ii.) $2.5\text{cm} > \phi$ ものの2種があり、分析総点数102点中 i.)の範囲に入るもの79点(77%)、ii.)の範囲に入るもの23点(23%)を数える。各々の出土層位ごとの出土傾向は、以下に示すような状況であるが、層位的に上位へ向かうほどツマミ径が縮小化しつつあるような傾向を示している状況がうかがえるものの、第Ⅲ層出土資料中においてii.)の範囲に納まるものが減少している傾向を示しているかのようなのである。今後層位的におさえられる遺物群中において検討する必要があるだろう。

出土層位	X層	Ⅷ層	Ⅵ層	Ⅴ層	Ⅳ層	Ⅲ層
i.) $\phi \geq 2.5\text{cm}$	8(89%)	13(87%)	25(78%)	14(67%)	0	19(86%)
ii.) $2.5\text{cm} > \phi$	1(11%)	2(13%)	7(22%)	7(33%)	3	3(14%)

またツマミ形状については、全てツマミ中央部が凸形に仕上げられ、偏平な形状を示している。このような形状から接合の回転ナデの後、上部より押さえつけるツマミ形状調整のための回転ナデ工程が加えられているものと考えられる。これは天井部内面において、下方へ押し出された形状を示すものの存在からも傍証できよう。したがってツマミ形状属性に関しては、分類標識としては有効ではない。



Fig. 25 形態属性-(i)

c.) 口縁部形態は、断面三角形を呈する形状のものが主体を占めている。また極微量ながら、かえりを有する口縁部形態のものが出土し、出土層位も窯跡本体埋土中・灰原Ⅶ層から小破片として出土しており、本窯跡における焼成器種として含まれるものであるかは疑問が残る。



Fig. 26 形態属性-(ii)

さて、主体を占める断面三角形を呈する形状を示すものは、大きく3種の形状のものが存在している。i.)断面形状が下方へ伸びる口縁端部形状を取るもの (Fig. 25)、ii.)断面三角形の形状を取るもの (Fig. 26)、iii.)口縁端部断面形状において三角形をかるうじて呈しているもので、端部内面に屈曲のための稜線が不明瞭なもの (Fig. 27) である。各々の出土傾向は分析総点数166点中、i.)の範疇で捉えられるもの8点(5%)、ii.)の範疇で把握できるもの152点(92%)、iii.)の範疇で捉えられるもの6点(3%)を占めている。明らかにii.)の範疇で捉えられるものを主体として、構成されていることが理解できる。では、各属性の層位ごと出現頻度を以下に示す。



Fig. 27 形態属性-(iii)

出土層位	X層	Ⅷ層	Ⅶ層	Ⅵ層	V層	Ⅲ層
i.)形態	1(11%)	1(6%)	2(3%)	1(3%)	0	3(8%)
ii.)形態	8(89%)	17(94%)	56(95%)	37(97%)	3	31(79%)
iii.)形態	0	0	1(2%)	0	0	5(13%)

この表から概略的に層位が上位へ移行するにつれiii.)の形状を示すものが極微量ながら存在するような状況がうかがえる。しかし、口縁端部の形状属性は焼成の際生じる歪みによって、本来保有していた形状に変化をきたす例が多々見受けられる。つまり、同一個体中において異なる属性が伴っている場合が存在している。この場合、分類標識として口縁端部形状属性が有効であるのか否かについて、詳細な検討が必要となろう。ここで取り上げた分析対象資料は、原則として残存部1/4以上の資料を抽出し行った。

e.)天井部外面の処理は、先学諸氏によって i.)回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り等の処理が加えられるもの (Pl. 12・13)、ii.)回転ヘラ切り後、未処理のもの (Pl. 14) が存在していることが指摘されている。今次調査における出土遺物中においても、2種が看取できる。この2種の出土傾向は、分析総点数157点中において i.)に該当するもの149点 (95%)、ii.)に該当するもの8点 (5%) を数える。では、出土層位ごとの出現頻度を以下に示す。分析対象資料は、蓋cと認識でき天井部外面の処理が観察できる1/4以上残存の資料を抽出し行った。

出土層位	X層	VIII層	VII層	VI層	V層	III層
i.)のもの	0	0	3 (5%)	3 (8%)	0	2 (6%)
ii.)のもの	9	18	55 (95%)	35 (92%)	3	29 (94%)

この表からは、層位の上位への移行に伴って出現頻度の顕著な変化はうかがえない。つまり操業期間内における製作工程に顕著な変化は、想定し難いということになる。しかしこのことが分類標識としての天井部外面処理を、有効属性として抽出し難いということには結び付かない。ii.)に該当する個体は、製作工程の省略を示すことであり、i.)との関係が今次調査の結果では明らかにし難いということを示したにすぎない。

属性の相関

さて、上記の各属性間に相関性が存在しているものか否かについて検討を加える。作業前提として、3属性を伴い観察できる個体の抽出があるが、破片資料から満足できる個体破片を抽出するには困難さを極めた。その様な中で分析総点数89点を抽出することができた。しかし、各層位ごとに検討ができるほどの点数は抽出し得ていない。したがって、ここでは出土層位を捨象し3属性間の相関性について検討してゆく。以下において便宜的に口縁端部形状を分類主属性に置き、他の2属性との関



Pl. 12 天井部外面の処理-(i)



Pl. 13 天井部外面の処理-(ii)



Pl. 14 天井部外面の処理-(ii)

係を示した。

	回へ切未処理	回へ切後処理	ツφ ≥ 2.5cm	2.5cm > ツφ
i.)形態		2	2	
ii.)形態	7	70	58	19
iii.)形態		1	1	

微量の出土量を示す属性 i.)ならびに属性 iii.)に関しては、型式と認定できる条件をそのまま備えている。それに対し属性 ii.)に関しては、いま一つの検討が必要である。つまり天井部外面の処理属性とツマミ径の属性との相互の関係を検討しなければならない。これらの関係は、回転ヘラ切り後未処理のものには全てツマミ径2.5cm以上のものと対応しており、これらの属性を有するものが1型式として認定できるものと考ええる。

以上の各属性の相関関係より、以下に示す型式が認定できることになる。

1. 灰原Ⅵ層出土資料 (Fig. 10-1) を基準とするもので、口縁端部属性 i.)-天井部外面の処理は回転ヘラ切り後処理を行うもの。-ツマミ径が2.5cm以上を測るものである (Fig. 28)。

2. 灰原Ⅲ層出土資料 (Fig. 8-1) を基準とするもので、口縁端部属性 ii.)-天井部外面の処理は回転ヘラ切り後処理を行うもの。-ツマミ径が2.5cm以上を測るものである。この型式が出土総点数の過半数以上を占めている (Fig. 29)。

3. 灰原出土資料 (Fig. 13-2) を基準とするもので、口縁端部形状ならびに天井部外面の処理は前記2.)と同じであるが、ツマミ径が2.5cm以下を測るものである (Fig. 30)。

4. 灰原出土資料 (Fig. 13-10) を基準とするもので、口縁端部属性 ii.)-天井部外面の処理は回転ヘラ切り後未処理のもの。-ツマミ径が2.5cm以上を測るものである (Fig. 31)。

この型式は、出土総点数中7点 (9%) 程度を占め微量に出土する傾向を示している。



Fig. 28 型式-1 実測図(1/3)



Fig. 29 型式-2 実測図(1/3)



Fig. 30 型式-3 実測図(1/3)

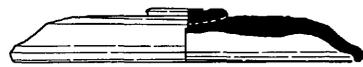


Fig. 31 型式-4 実測図(1/3)

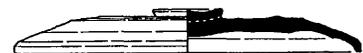


Fig. 32 型式-5 実測図(1/3)

5. 灰原Ⅲ層出土資料 (Fig. 8-4) を基準とするもので、口縁部属性iii.)-天井部外面の処理は回転ヘラ切り後処理を行うもの。-ツمامミ径が2.5cm以上を測るものである。口縁端部形状については、太宰府市教育委員会にて分類している蓋口縁部属性4類とは異なっており、いくぶん3類に近い形状をとどめているものである (Fig. 32)。

変化の方向性

坏cの分類と型式設定において示したような変化の方向性は、蓋c3に関しては各属性の層位的変化の推移が不明瞭であるため、明瞭にし難い状況である。このことが、宮ノ本遺跡9号窯跡の製作集団内において、蓋cの変化が坏cの変化と平行していないことを示しているものなのか否かについては検討が必要であろう。

型式の空間的安定性の検証

さて前述してきた坏c・蓋c3の諸型式が、牛頸窯跡群内の窯跡ならびに消費遺跡から出土しているものであるのか、つまり型式として安定し得ているのか検討が必要となる。

同様の型式と認定し得る資料を出土している窯跡群については、第Ⅱ章において記述した7窯跡群・37窯跡が存在している。また消費遺跡関連資料では、大宰府政庁周辺ならびに大宰府条坊跡内において少数例ながら出土している。既報告分としては、大宰府史跡 第85次SD2340 下層出土資料、大宰府条坊跡 第19次SX075 出土資料中に記載されている。また他地域における出土例としては、筑後国府跡2次SK003・3次SD001・79次SD3500 出土資料、久留米市神道遺跡 第2次SI001、6次調査SI121・SI122・SI123、久留米市ヘボノ木遺跡 第16次SI1794・SX1464 出土資料、久留米市水洗遺跡SK007 出土資料さらに、佐賀県大和町久池井B遺跡SK734・SK759・SK764・SK775・SK776 出土資料等の中に看取できる⁹⁾。生産遺跡中においては、前述したように37遺構(窯跡)が検出されているにもかかわらず、消費遺跡ならびに窯跡群の成立背景としての大宰府内においては散見するという特徴を示している。ところで上記の各遺構において、設定した各型式が主体となって出土するというのではなく、単に定性的な意味において出土しているということであり、遺構の性格ならびに出土状況を無視した形で認定している。しかし型式の安定を認定するには、遺構出土資料の定性分析で充分であると考えられる。

したがって列記した窯業遺跡ならびに消費遺跡の各遺構から、9号窯跡灰原より出土した遺物群の型式が出土しており、分類設定した各型式の空間的な安定状況が看取できる。

灰原出土資料の時間軸上での位置付け

本来ならば、設定した各型式ごとの存続幅を考慮した時間軸上での位置付けを作業前提として、今次調査において出土した資料群総体としての時間的位置付けを、検討しなければならない。しかし、設定した各型式の空間的安定性の認定の項にて既に述べたように、各型式の時間

軸上での存続幅を検討できるだけの資料数に達し得ていない状況である。したがってここでは、総体としての土器群から時間軸上への位置付けを検討する。

今回出土した資料組成に最も近似した組成を示すものとして、大宰府条坊跡 第19次調査 SX075 ならびに佐賀県久池井B遺跡出土資料がある。いずれも実年代を比定できる資料は共伴しておらず、遺物群への実年代付与には至らない。ところで、設定した坏cの型式の中で7)・8)の群に比定できる資料群を主体とする資料が、大宰府史跡 第85次 SD2340 下層出土資料中に見られる。この遺構からは多量の土器群と共に、「天平六年」銘の紀年銘木簡が共伴しており、土器群の分析を踏まえて八世紀前半の基準土器群に比定されている。このことから分類型式7)・8)群の時間軸上における分布中心の一側面をこの時期に比定でき得るものとする。前述したように、宮ノ本遺跡 9号窯跡灰原出土資料の主体を占める資料は、分類型式7)・8)より先行する型式群であり、八世紀前半を遡る可能性を示している。しかし、具体的に実年代の比定を行うには、前述したように9号窯跡焼成型式と比較検討できる資料の不足をはじめとして、生産遺跡と多種多様な土器群によって構成される消費遺跡という条件下では、さらに詳細な検討が必要となる。このような理由から、ここでは、上記の可能性を指摘しておくにとどめる。ただし窯の耐久時間を、現在使用されている窯場での耐久年数から推測すると、長くても従来考えられている年数は存続し得ないと考える⁷⁾。したがって窯の使用時期は、八世紀前半のある一時期に限定できるのではないかと考えている。

9号窯跡の構造

9号窯跡の有する窯体構造については、第Ⅲ章において詳細を述べてきた。ここではこれらの諸事象を踏まえて、9号窯跡と他窯跡の持つ構造との比較から空間的な位置付けについて検討を加えてみたい。

9号窯跡と同様な遺物の型式組成を有する窯跡は、前述したように牛頸窯跡群において7窯跡群37窯跡が所在している。これらの窯跡における焼成部床面傾斜角は、 20° ～ 45° と一定した状況は示しておらず、9号窯跡に関してもこれらの範囲内に収まる傾向を示している。また窯体の平面形状についても同様であり、9号窯跡と他の37窯跡の有する構造を比較した場合、顕著な差異は見い出せない。しかし、9号窯跡に見られる煙道部の修復に伴った縮小構造は、既報告の窯跡には看取できない。この構造が特殊事例であるのかについては、今後の調査にかかっていることであり明言は避けるが、このような縮小構造の意味について、気付いた点をまとめることで今後の調査指針としたい。

製品の焼成過程終了時の作業工程は、現在行われている窯場での事例を参考にすると、窯体内への空気（この場合、主に酸素であろうが）の供給を断つこと、急激な窯体内温度の低下を防止することの二点に重点をおいた処置が取られている。すなわち窯体開放部分である焚口な

らびに煙道部を、閉塞するという処置が取られている。この閉塞処置には、様々な方法が取られているのであろうが、最も簡易かつ一般的な方法として、これらの部分を窯構築土を用いて閉塞する方法が取られているようである。このような工程を、須恵器生産遺構に投影した場合、どのような状況を呈して検出できるのか、どのような充分条件が必要であるのかという問題が生じる。閉塞を示す事例は、散見する程度であるものの、煙道部閉塞に大甕の破片が用いられたのではないかと考えられる例が数例報告されている。特に顕著な例として、井手窯跡群内に所在する33・43号窯跡がある。煙道部上端径が0.3mないしは0.4m測るもので、煙道部上端に大甕の体部破片を用いて閉塞されている。また可能性をうかがえる事例としては、煙道部周辺ないしは奥壁部において須恵器の大甕・蓋・坏を出土する例を見い出せる。これまでのところこれらの事例についての解釈としては、大甕の破片以外の資料が完形の形で出土することから、祭祀行為に伴った資料との解釈がなされてきた。しかし煙道部径を考え合わせると、大蓋ないしは複数の製品を積み重ねることで充分に役立つことになる。このようなことから煙道部ないしは奥壁部にて出土する破片資料の解釈には、異なった観点からの考察が必要であると考える。既報告資料としては、以下に列記した窯跡において看取できる。しかし全ての事例が、窯跡閉塞のために用いられたとは考え難い点もある。

このように考えると9号窯跡煙道部縮小に関しては、焼成終了時における閉塞を容易にする目的で成されたと解することもできよう。今後、煙道部周辺における附属施設の解明も含めて検討すべき課題であろう。加えて、焚口部の閉塞に使用される粘土の土量ないしは閉塞施設に関しても検討を要する課題と考える。

遺跡名	出土資料	掲載文献
井手窯跡群4号窯	蓋・高坏	①
足洗川窯跡群34号窯	坏c	①
道ノ下窯跡群14号窯	蓋c3	①
井手窯跡群19号窯	蓋c3	②
井手窯跡群33号窯	甕破片	②
井手窯跡群43号窯	甕破片・蓋c3	②
井手窯跡群44号窯	甕破片	②

—文献—

- ①福岡県教育委員会（1988）【牛頸窯跡群Ⅰ】
- ②福岡県教育委員会（1989）【牛頸窯跡群Ⅱ】

②焼土壙

第4次調査によって、焼土壙2基が9号窯跡灰原の下位より検出された。構造ならびに立地の詳細は、第Ⅲ章において述べてきたところである。

ところでこれらの焼土壙の立地および形態から導き出される解釈については、狭川真一(1990)において述べられており、氏の所見を発展させる見解は、まだ見い出せていない。窯跡付帯の焼土壙としての性格付与には、窯構築時ならびに製品焼成の際木炭が必要であるのか等の解決しなければならない事象が山積している。少なくとも宮ノ本遺跡 第4次調査例では、灰原の下位に形成されており、窯とは独立した遺構と解した方が可能性が高いようである⁸⁾。したがって窯跡付帯の焼土壙とは、考え難い状況を示している。しかし、実際のところ焼物を焼成されている現在の民俗例を参考に検討が必要なことであり、机上で空論を巡らすよりは実際窯場における焼成実見を行うことも、解決の糸口を掴む一助になり得ることかもしれない。

狭川真一他(1990)『太宰府天満宮Ⅱ』

③問題点の抽出

以上調査および遺物の整理過程において思考し、気付いた点を列記してきた。この過程において生じてきた問題点を以下に記述し、今後の検討課題としたい。

1. 窯体構造上の問題点

- a. 煙道部ないしは煙道部周辺に出土する遺物の解釈。
- b. 焼成終了時の閉塞行為の有無と行為内容。
- c. 窯体保護のための附属施設の構造。
- d. 燃料保管および焼成する製品の保管施設。
- e. 窯体への道。

2. 出土遺物の問題点と限界

- a. 焼成器種組成。
- b. 抽出属性の多様化と客観化。
- c. 設定型式における変化の方向性の検証。
- d. 設定型式の時空間軸上での推移。
- e. 設定型式の共伴関係。
- f. 実年代付与資料の抽出。

3. 焼土壙の持つ問題点

- a. 性格。
- b. 形成年代。

一註一

- 1) 製品として消費者の要求に耐え得るものは、搬出されていることは述べるまでもなく想定され得ることである。例外として、焼成時に不意の事故によって崩壊した窯と認定できる遺構からの出土資料があるものの、それ以外のものについては、製作時の組成を検討するには、不足器種が存在していることを考慮しなければならない。したがって半定量的に数値を層位ごとに示したことについて、宮ノ本9号窯

- 跡における全焼成器種を網羅しているとは考え難い。出土傾向の一端を示したものとして理解したい。
- 2) 遺物分類の呼称に関しては、従来太宰府市教育委員会において呼称されている分類呼称方法をとった。つまり7世紀に分布中心を有している丸みのある高台付きの坏と、8世紀に分布中心を有している直線的な体部形態を持つ高台付き坏を同一呼称で記述していることになる。分類呼称においては、検討すべき課題である。
 - 3) 遺物の分類に関しては、遺物が有している全属性を検査し、時空間軸上において優位な属性抽出から、分類作業を進めてゆく方法が理想である。したがって、色調・成形・調整・形態・胎土等の肉眼によって観察できる諸属性の抽出から、分類作業を進めてきた。これらの諸作業は遺物を実測する過程において、思考された遺物観察表中に記載されるべきものである。しかし客観化を進めるべく行う諸作業ならびに観察表作成においても、観察者ならびに分類者によって視点が異なり各々の主観が入ることは否め無い。したがって、ここに述べる分類案については、報告者の意図に沿った分類であることをあらかじめ述べておく。
 - 4) 出土遺物の属性存在度の認定に関する分析は、同一個体破片による重なりを捨象してやらなければならないが、現状においては非常に困難な作業である。したがってここでは、明らかに色調・成形・調整の各属性から同一個体と認定し得る資料を除外したのみにとどめている。
 - 5) 系譜関係を考える手だてとして示した系統図であり、横方向の配列は共時性を示しているものではない。共時性の課題に関しては、消費遺跡での出土傾向・相伴関係を含めた形での検討が必要となる。
 - 6) 各々の遺構出土資料との詳細な比較検討に関しては、以下に示した各遺跡報文を参考にし検討した。比較方法の詳細に関しては、ここでは省略する。
- 大宰府史跡 第85次 SD2340 下層
九州歴史資料館 (1984) 『大宰府史跡 昭和58年度概報』
- 大宰府条坊跡 第19次 SX075
太宰府市教育委員会 (1984) 『大宰府条坊跡Ⅲ』
- 筑後国府跡 第2次 SK003-3次 SD001
久留米市教育委員会 (1977) 『筑後国府跡Ⅱ』
- 筑後国府跡 第79次 SD3500 上層
久留米市教育委員会 (1989) 『筑後国府跡・国分寺 -昭和63年度-』
- 水洗遺跡 SK007
ヘボノ木遺跡 第16次 SX1464・第28次 SI1794
久留米市教育委員会 (1986) 『東部土地地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告 第5集』
- 神道遺跡 第2次 SI001 第6次 SI121・SI112・SI123
久留米市教育委員会 (1987) 『東部土地地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告 第6集』
- 久池井B遺跡 SK734・SK759・SK764・SK775・SK776
佐賀県教育委員会 (1990) 『惣座遺跡』
- 7) 窯の存続年代を、出土した遺物の定性的な分析に基づく存続年代として示してある場合が見られる。しかし窯の耐久年数は、登り窯の場合修復無しに50年間も存続し得るかは疑問である。
 - 8) 未報告事例であるが、宮ノ本遺跡 第5次調査にて同様の形態を示す焼土壘を数例検出している。特にその中の1基は、段造成ののち土壘を形成しその内部で焼成を行っている。立地は丘陵中腹部であり、かならずしも第4次例とは一致しないが、宮ノ本遺跡の有する性格を加味した解釈をしなければならないと考える。

V. まとめ

今回第3次・第4次調査において検出した種々の遺構・遺物に関して、所見を述べてきた。無遺構であった第3次調査においても、縄文土器細片の有する意味付けには、単なる採集遺物という意味付け以上に歴史的な解釈がなされる可能性を秘めている。また同じ意味で、9号窯跡の窯体ならびに灰原にて出土する多量の遺物群の分析と同様に、下位に検出できた焼土塊の性格付けを成すべきであったと考える。今後の調査指針としたい。

Tab. 3

須恵器の法量表

焚口床面出土 (Fig. 7)

A. 番号 B. 挿図番号 C. 内底のナデの有無 $\bigcirc \times$ D. 板状瓦痕の有無 $\bigcirc \times$ 単位cm

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
坏c	1	1	11.75	3.9	8.4	○	—
ク	2	2	11.8	3.85	8.4	○	—

窯体内埋土 (Fig. 7)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋c3	1	4	13.65	1.8	9.8	○	—
蓋c1	2	3	(14.9)	2.3	(10.9)	?	?
壺蓋a	5	5	—	3.0	—	—	—
坏c	3	6	(11.4)	3.95	(7.5)	○	—
ク	4	7	(13.1)	3.85	(8.8)	○	—

II層出土遺物 (Fig. 7)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋c3	4	10	(14.2)	2.8	(10.0)	○	—
小蓋a3	5	9	(11.0)	1.1	(7.6)	—	—
坏c	1	11	(12.0)	4.3	(8.2)	○	—
ク	2	12	11.75	3.85	(8.4)	○	?
ク	3	13	(11.9)	3.55	(7.3)	○	—

III層出土遺物 (Fig. 8)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋c3	10	1	(13.2)	2.3	(3.3)	○	—
ク	11	4	(13.5)	1.7	(2.5)	○	—
ク	12	5	(13.75)	1.05	(2.6)	○	—
ク	13	2	(13.7)	1.9	(2.6)	○	—
ク	14	3	(13.7)	2.0	(2.6)	○	—
小蓋a3	15	8	10.55	1.8	8.55	○	—
ク	16	7	10.0	1.5	6.3	○	—
壺蓋a	17	6	(16.25)	3.25	(13.7)	?	?
坏c	1	17	(12.3)	4.5	(7.6)	○	—
ク	2	14	(12.6)	4.6	(8.8)	?	—
ク	3	16	(12.15)	4.5	(8.4)	○	—
ク	4	15	(13.9)	4.2	(8.4)	○	?
ク	5	11	(11.7)	4.6	(8.15)	?	?
ク	6	12	(12.35)	3.95	(7.9)	?	?
ク	7	13	—	3.0	(8.3)	○	?
小坏c	8	10	(11.0)	3.45	(7.0)	○	?
ク	9	9	(9.65)	3.1	(6.95)	○	?

IV層出土遺物 (Fig. 9)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋c3	4	1	(13.5)	2.0	(9.7)	○	—
小蓋a3	5	3	(10.25)	1.7	(6.8)	—	—
蓋3	6	2	(14.9)	1.0	(14.9)	○	—
坏c	1	4	(12.65)	4.4	(8.0)	○	—
ク	2	5	—	2.3	6.4	○	—
椀	3	6	(17.0)	4.9	—	—	—

V層出土遺物 (Fig. 9)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋c3	4	7	(13.9)	2.1	(9.2)	○	?
小蓋a3	2	8	(11.2)	1.25	(7.1)	○	—
壺蓋a	3	9	(18.4)	3.0	(16.1)	?	?
坏c	1	10	(14.8)	4.6	(9.95)	○	?

Tab. 4

VI層出土遺物 (Fig. 10)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋 c 3	15	4	14.1	2.15	9.5	○	—
〃	16	3	13.4	2.15	8.3	○	—
〃	17	2	13.6	2.2	8.9	?	—
〃	18	7	14.1	1.7	10.3	○	—
〃	19	6	13.3	1.9	9.4	○	—
〃	20	1	(13.5)	1.6	(8.1)	○	—
〃	21	8	(13.1)	1.4	(9.3)	○	○
〃	22	5	(14.2)	2.0	(11.3)	○	—
小蓋 a 3	11	9	(10.0)	1.3	(7.2)	○	—
〃	12	10	(10.9)	1.4	(7.8)	○	—
〃	13	12	(11.7)	1.75	(8.1)	—	—
〃	14	11	11.6	1.1	8.2	—	—
蓋 3	23	14	(12.6)	1.65	—	—	?
〃	24	15	(14.2)	0.7	—	?	?
〃	25	13	(16.8)	1.7	—	?	?
坏 c	1	20	12.3	3.7	8.1	○	—
〃	2	21	(12.15)	3.65	(8.1)	○	?
〃	3	18	(12.25)	3.6	(8.5)	○	—
〃	4	19	(12.25)	3.45	(7.6)	○	—
〃	5	25	(12.9)	4.25	(9.25)	?	?
〃	6	24	(12.4)	4.25	(9.15)	○	—
〃	7	23	(12.8)	4.45	(7.7)	○	?
〃	8	22	?	(3.7)	(8.6)	○	?
〃	9	16	(11.0)	3.5	(7.3)	○	?
〃	10	17	(9.3)	3.2	(6.25)	○	—

VII層出土遺物 (Fig. 11)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋 c 3	8	1	14.75	0.8	13.9	○	—
〃	9	2	13.5	1.9	8.5	○	—
〃	10	3	13.5	2.9	8.4	○	—
〃	11	4	15.2	1.4	10.1	○	—
〃	12	5	12.7	1.7	8.2	○	—
〃	13	6	13.6	2.2	9.9	○	—
小蓋 a 3	14	9	10.7	1.15	7.4	—	—
〃	15	10	10.85	1.7	7.0	—	—
蓋 3 or 4	16	8	—	1.0	—	—	—
蓋 1	17	7	—	2.3	—	—	—
壺蓋 a	18	18	—	3.25	—	—	—
〃	19	19	—	2.95	—	—	—
壺 b	20	20	11.25	26.7	10.4	—	—
坏 c	1	14	(12.5)	4.2	(8.2)	○	—
〃	2	13	(12.3)	4.6	(7.8)	○	—
〃	3	15	(12.7)	4.4	(9.8)	○	—
〃	4	—	(12.5)	4.1	(8.2)	○	—
〃	5	11	—	1.8	(7.8)	○	—
〃	6	6	—	1.5	(8.85)	○	—
小坏 c	7	17	(9.9)	3.7	6.8	○	—
〃	21	16	10.3	3.9	7.2	○	—

Tab. 5

Ⅷ層出土遺物 (Fig. 12)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋 c 3	1	3	(13.7)	2.25	(10.0)	○	—
〃	2	1	(12.9)	1.75	(8.15)	○	—
〃	3	2	(13.2)	2.1	(8.85)	○	—
〃	4	4	(13.4)	1.15	(10.4)	○	—
蓋 3	5	7	(15.0)	1.2	?	○	?
〃	7	6	?	0.8	?	○	?
小蓋 a 3	6	5	(11.2)	1.3	(7.4)	○	?
坏 c	8	8	(11.9)	3.55	?	?	?

X層出土遺物 (Fig. 12)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
蓋 c 3	1	10	14.5	2.3	8.25	○	—
〃	2	11	13.7	2.1	9.3	○	—
〃	3	12	13.25	2.4	8.5	○	—
坏 c	4	13	(12.35)	4.3	(7.6)	○	○

補足資料 (宮ノ本1次) (Fig. 24)

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
坏 c	1号窯	—	13.5	5.15	9.6	—	—
〃	2号窯	—	13.1	5.1	10.2	○	—

圖

版



調査開始前の宮ノ本遺跡（南西から）



調査開始前の宮ノ本遺跡、3次調査地点（南東から）



第3次調査地点から太宰府の平野を望む



第3次調査地点空中写真(東半部)



第3次調査地点空中写真(西半部)



第4次調査区全景（西方より）



第4次調査区西半部（北方より）



9号窯跡全景 (北方より)



4S×001・002 焼土壙全景 (北方より)



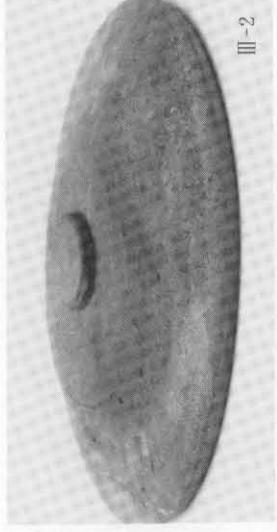
9号窯跡灰原堆積状況① (東方より)

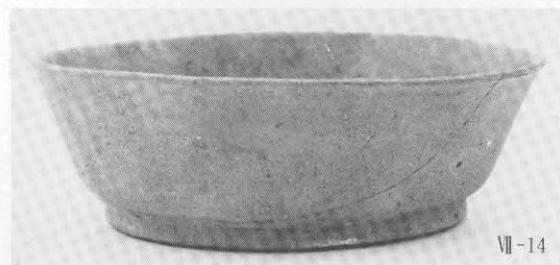
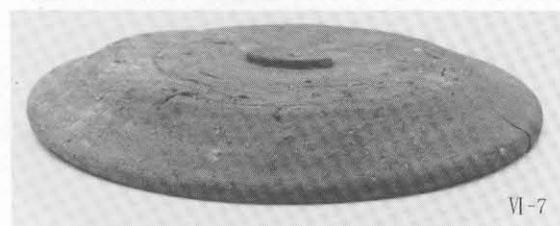
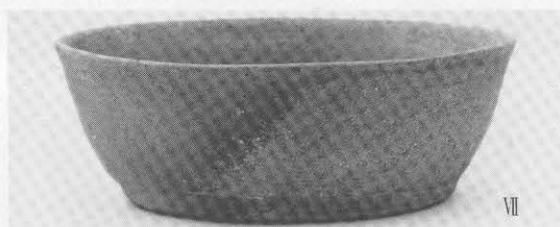
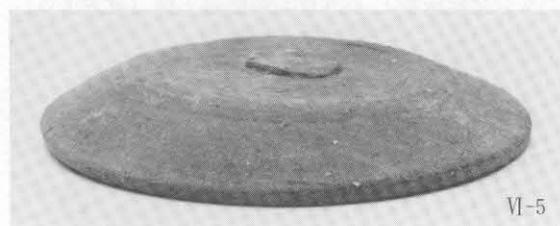
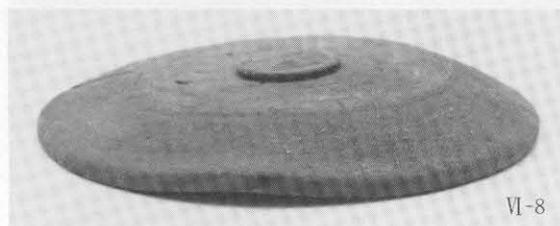
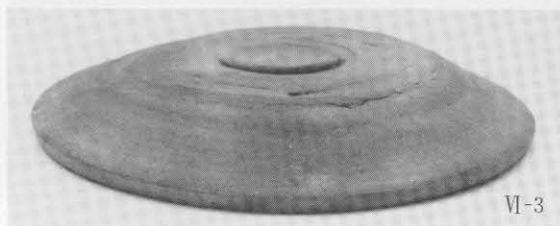
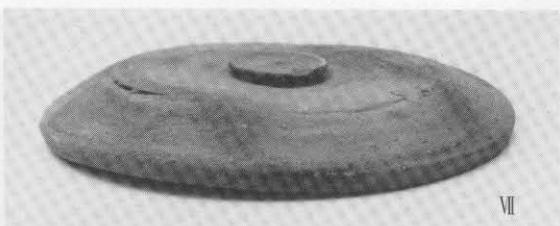


9号窯跡灰原堆積状況② (東方より)



9号窯跡灰原と4S×001の関係土層（東方より）







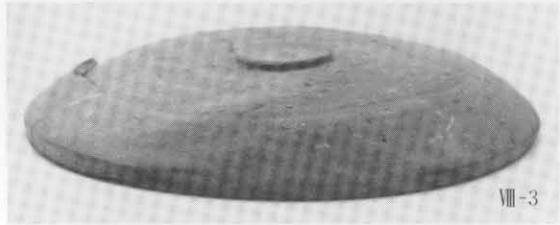
Ⅶ-20



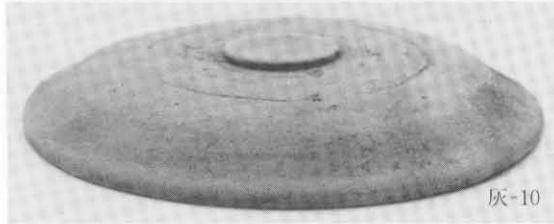
Ⅶ-21



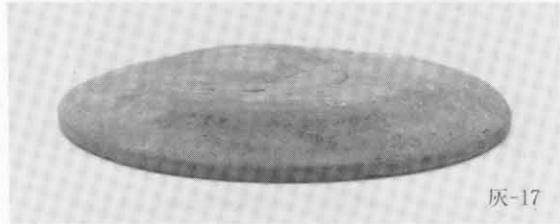
灰-5



Ⅷ-3



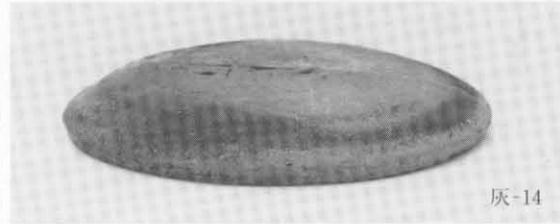
灰-10



灰-17



灰



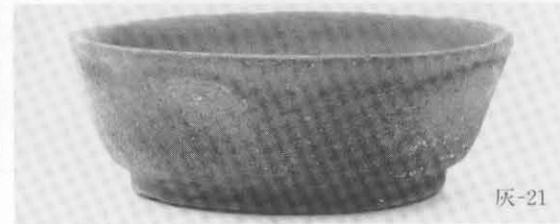
灰-14



灰-11



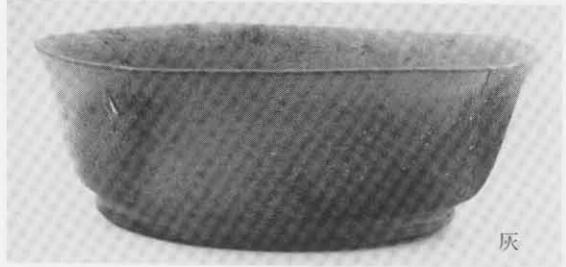
灰-19



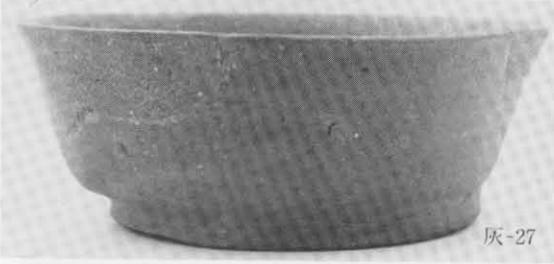
灰-21



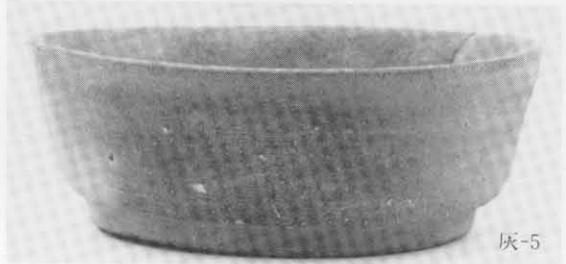
灰-25



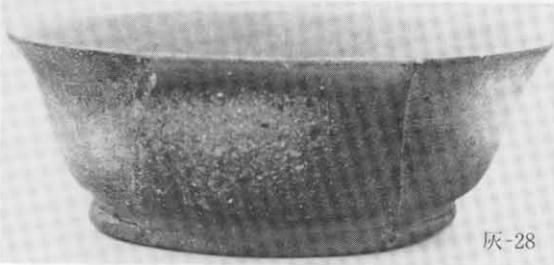
灰



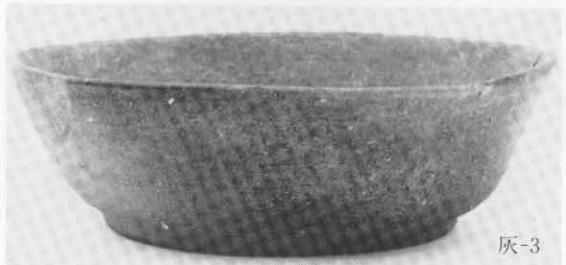
灰-27



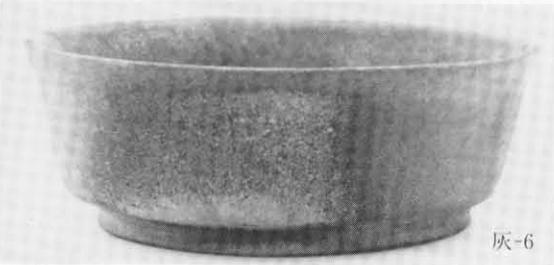
灰-5



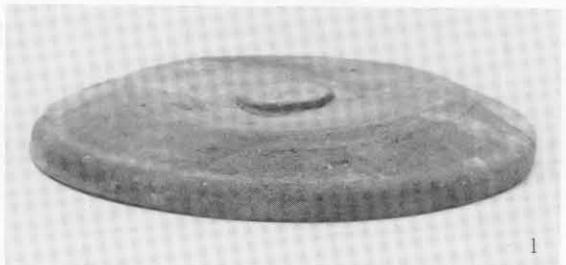
灰-28



灰-3



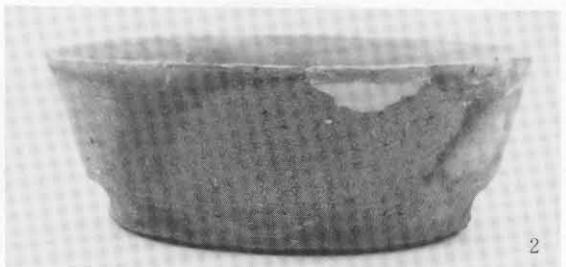
灰-6



1



灰-9



2



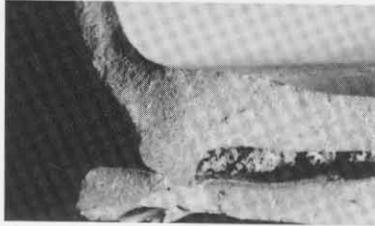
3



蓋c3天井部外面
ヘラ記号
Ⅲ層出土
(Fig. 8-2)



蓋c3つまみ接合状況
(Fig. 10-1)



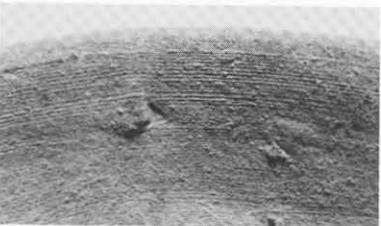
溶着資料
坏c-蓋c3



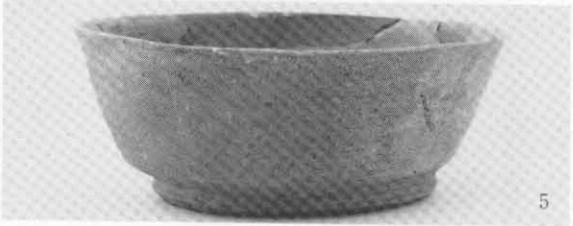
小蓋a3天井部
ヘラ記号
Ⅲ層出土



4



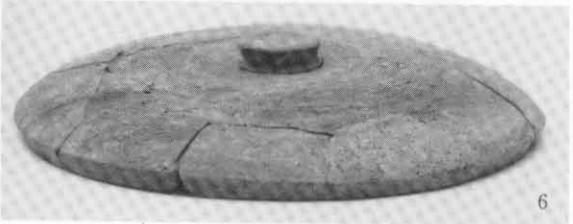
口縁端部調整
(内面)
(Fig. 14-1)



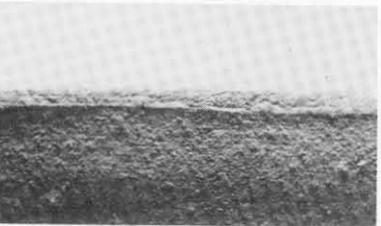
5



口縁端部調整
(外面)
(Fig. 14-1)



6



口縁端部調整
(外面)
(Fig. 14-5)



7

補足関連資料

1～5：宮ノ本遺跡 第1次調査出土資料

6・7：篠振遺跡 第1次調査灰原出土資料

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅱ

(宮ノ本遺跡第3・4次調査)

— 太宰府市の文化財 第17集 —

平成3年3月20日

発行 太宰府市教育委員会

太宰府市観世音寺86

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1丁目10-15